次ぐ聲譽を得てゐるが王三黑は途中で廢業したのは惜しい。三黑、身手絕倫而も勇武のうちに溫文の氣質を失はず、最古の儒將の風があつた。七歲紅に次いで正樂社武行の領袖となつた。長靠戲に長じ、「長板坡」「桃華車」の二劇は他人の追隨を許さなかつた。卒業後暫らくして廢業し、今は陸軍部か海軍部かの小役人になつてゐるといふ。

方洪壽　同じく正樂社の弟子で、王三黑の副であつたが、漸次頭角を露はし、王去るや武行の領袖となつた。短小精悍、短打戲によく、「臥虎溝」「小東營」等佳卒業後外江を廻り、名を忘れられてしまつた。

何連濤　富連成科班の弟子で、卒後引續き同班で演じてゐる。扮相魁梧、武王に於いては同輩武生の第一人であるが、嗓がない。武淨劇に長じ、「鐵龍山」「艷陽樓」「收關勝」等佳。舞刀の技に長じ、「大刀何」の綽名があつた。

殷連瑞　富連成科班出身何連濤と一時の瑜亮と稱せられた。

趙連升　何殷二人と同學長靠短打共によし。而も卒業後兪振庭の斌慶社に入り祿々名を忘れられやうとしてゐるのはどういふわけか。

小雙喜　民國四五年の頃崔靈芝等の秦腔班に隷して輕妙な藝を見せてゐた少年俳優である。今もたしか天橋の秦腔班でやつてゐる筈。

兪華庭　兪菊笙の末子(妾腹)で斌慶社の武生。相當に演れるがあまり人氣はない。

兪少庭　矢張り兪振庭の親族だと思ふ。斌慶社で演つてゐるが華庭に比し一層劣る。

高月秋　玉成科班の出身だといふから、小寶義等と同學であらう。武技に長じ最輕業的の藝を得意としてゐた。「花蝴蝶」「四杰村」「界牌關」「金錢豹」等が當り藝。嗓音なく扮相も惡く大して成就するところがなかつた。

楊幼朶　名女形楊桂雲の次子で、小朶の弟である。字は孝方。藝平庸。その子が少年老生の楊寶森(前出)である。

小小寶義　小寶囊(前出)の子、今上海で少年俳優で賣出してゐる。

茹玉麟　南方配角武生の錚錚たるものである。正角としては任に勝へない。

小菊仙　扮相軒昂武工着實。「金錢豹」「花蝴蝶」「四杰村」等佳。

小菊奎　小菊仙と同師でその弟分に當る。藝は頗る小雙喜(前出)に似てゐる。「四杰村」「淮安

府』『招賢鎭』等。

路凌雲　初め文武老生を唱つてゐたが後武生に改めた。中等の材。

小明海亮　明海亮の弟子初めは矢張り文武老生であつた。「金雁橋」『招賢鎭』『八大錘』『花蝴蝶』等を推す。

趙盛璧　富連成科班の學生で本年十八歳。北京人。長靠戲に長ず。「長板坡」『惡虎村』『連環套』「洗浮山」等を得意とす。

沈富貴　富連成科班に於いて何連濤の後沈が名を得ることが早かつた。卒業後尙同社にゐる。

程富恩　天津人で富連成科班出身。本年二十一歳。「金鎖陣」『殷家堡』等佳。

李萬春　民國十二年兪振庭は上海から小怪物を引張つて來た。文武老生李萬春は卽ちこれである。本年十六歳。上海の武淨李永利の子で、唱工口白共に楊小樓に絕似し、少年俳優として近年かやうな人材は見たことがない。今日のやうな調子に進んで行けば、ドエライものになると思ふが、これまでの例によればそれは望まれない。

× × × ×

武生としては此外に崑曲武生としての王益友、朱小義や、票友武生果鍾語、董伯平、劉澤泉や、女優武生、李鳳雲、趙紫雲、干紫雲、郭小樓、盧月霞、雲金紅等がある。ここに一言しなくてはならぬが、支那の女優武生は技藝としては大したものではないが、女子を以てあれ程猛烈な立廻りをやり得るといふのは、世界廣しといへども支那ばかりであらうといふことである。

第四章　青衣

京劇脚色の第二に位する「旦」は、「をんな」と訓ずべく、即ち女形である。可成り多くの分類がある。便宜のため左に表示する。

（正名）	（別名）	（通稱）
正旦	青衫	青衣
花旦	玩笑旦潑	花旦
	刺旦潑旦	
	風流旦貼	
花衫		花衫
閨門旦		閨門旦
武旦		武旦
刀馬旦		刀馬旦
老旦		老旦
彩旦	女丑	彩旦

正旦即ち青衣若くは青衫は、「生」の正生と相對するもので、役柄としての品位も亦正生に次ぐ。節婦烈女等に扮し、京劇での立女形である。唱は小生のそれに酷似した作り聲だが、白は小生と異り全部作り聲である。

花旦は不貞の意味を含める役柄で、淫婦毒婦等に扮する役柄である。一面玩笑風流、アバズレ等の意味を有することは、前に擧げた別名を見ても分る。扮相と白、做を重んじ唱を問はない。

花衫は正旦と花旦の間に位し、夫人侍女などに扮する役。閨門旦は未婚の女で裙子をつけてゐない。裙子をつけると花衫になる。右の花衫、閨門旦の二ツの役柄は、外見上花旦に類し今日では總稱して花旦となし、嚴格に區別する必要を見ない。

武旦は立廻りを主とする女形で、刀馬旦も同樣であるが、前者が徒立であるに反し、後者は必ず馬に乘つてゐることに依つて區別する。この區別は武生の長靠短打の區別に似てゐ、武旦は短

打武生に、刀馬旦は長靠武生に似てゐるとの解釋もつく。

老旦は老女役。その唱は老生のそれに類似し、而も一層派手な節廻はしが多く綺曼清婉の四字を以て形容される。

彩旦は女の道化役。ただ女形を取つてゐるだけで、大抵は丑の兼任となつてゐるから、本篇では之を「丑」の部に屬させる。事實彩旦專問の役者といふはないのである。

青衣と花旦とは、現在最多く混合せられ、殊に梅蘭芳出現以後、二者一に歸せんとする傾向がある。張聊子氏曰く

梅の藝は本青衣に屬せしも、近來技藝日に形はれ月に擴大し、偶々花旦戲を演ぜしことありしが、亦大いに座客の賛美を受けたり。凡そ此派の旦角は、もと余紫雲、王瑤卿の創成せし者、蘭芳よくその特徴を發揮し、更に光を大にしたり。最近又新に「散花」「奔月」「葬花」の各劇を編し歌喉嘹亮舞態偏僊、大いに世の激賞を受く。彼は青衣より進んで一種完全優美なる新式旦角となれるものなり。

第一節　金紫雲から王瑤卿まで

余紫雲　青衣として老生に於ける程長庚のやうな地位を得たるものは見出されない。やむを得ずんばそれ余紫雲か。然し余紫雲と時小福との地位の高下は、今容易に判定し難い。故に本章の劈頭に余紫雲を擧げたとて、必ずしも彼が第一人であるといふ意ではない。

紫雲は名老生余三勝の子で、名を硯芬といふ。貌極めて艶麗、身材亦修短度に合し、青衣を以て崑旦(崑曲女形)を兼ね「遊龍戲鳳」「虹霓關」「玉堂春」諸劇に名があつた。時に女形としては時小福、田桐秋二人が有名であつた。小福の青衣は典雅を以て勝り、桐秋の花旦は流利を以て著はれたが、紫雲は此二者の長を兼ね、聲譽の隆んなることも兩人の上に在つた。今日の梅蘭芳は、略々當時の余紫雲の地位であるが、當時は新聞紙のやうなものがあるではなし、其點は余程參酌せねばならない。

紫雲は今日の王瑤卿、梅蘭芳の先驅者である。その青衣花旦の特長を兼ね、一種優美なる女形を完成してゐた點に於いてである。

紫雲は徽班の出身なるに拘はらず、堯工に巧みであつた。堯工とは纏足の形を木製の義足で現はす術である。歐陽予倩の説明によれば、堯とは次のやうなものである。

堯は纏足の形、詰り男は足が大きいから一種の義足を用ゆる譯で、其義足は木製の纏足と同じ形で、底の長サ三寸許り、踵の上の方を鋭角に六寸ばかり延長したもので、その義足の上部に布の袋をつけてあります。さて女形は足を此袋の中に入れて、布で固く義足に卷きつけ、堯を穿き、その上に小さな鞋を穿き、始終爪先きで立つ。

稽古は最初之を穿いて歩かせる。肩を少しも動搖させず早く歩くことを稽古する。それが濟むと今度は眞直ぐに立つことを習ふ。それが出來るとこんどは瓦の上に立たせる。瓦の上に長く立つてゐられるやうならもう大丈夫である。

紫雲が「戲鳳」「虹霓關」「玉堂春」等の劇に當を取つたのは、此堯工の關係があるのである。

紫雲は性古玩を好み、鑑定に長じ毎年必らず山西陝西地方に仕入れに行き、厚利を得た。余家は今劇界有數の富家である。紫雲は光緒二十五年(明治三十二年)に歿す。

時小福　現存孫派老生の第一人時慧寶の父であつて典型純正な青衣として知られた。孫菊仙時代に「時小福唱教子、孫菊仙御碑亭」といふ諺があつた位で、役柄は違つてゐるが二人は一時の瑜亮と稱せられたものである。光緒二十六年(明年三十三年)歿。

胡喜祥　余三勝時代の名青衣。俞菊筠と共に芝居小屋を起したといふ記錄も殘つてゐる。年輩からいへば余紫雲時小福よりも先輩である。光緒十六年(明治三十三年)歿。

梅二瑣　當代の名優梅蘭芳の父で字竹芬崑旦梅巧齡の二男である。性溫婉貌姣好にして處女の如く、父の業を承けて景和堂私寓の主人となつた。諸名士、父巧齡を愛するの意を移して二瑣を愛した。樊增祥易順鼎等は皆その入幕の賓である。肺を病み明治三十九年頃歿、遺子裙姉時に十二歳、伯父大瑣に養はれて長成した。卽ち梅蘭芳である。

張芷荃　字は湘航、蘇州人。父雲亭は崑旦である。芷荃は四喜班に隷し、崑旦を以て皮黄の青衣を兼ね、喉音玉潤珠圓、「六月雪」「祭江」「二進宮」等に名があつたが、軀幹瘦小にして扮相枯寂に失し人氣がなかつた。韓家潭に絢華堂私寓を營んで、善奕を以て人に許された。その子は一昨年病歿した道化の名家張文斌である。

閻金福　北京人。幼にして天津上海に行き、成名の後北京に歸つて四喜班に入つた。その運腔

は纏綿悱惻のところ常紫和に脱胎し、觀客之を激賞した。惜らく軀幹短小で顏色殊に黑かつたので、閻黑子といふ綽名があつた。得意の劇は「蘆花河」「奇寃報第四本」等である。名淨何桂山と親友で、兩人共酒飲みであつた。子供が二人、長が嵐秋、次が嵐亭、嵐秋は目下武旦の第一人九陣風である。

吳順林　時小福の弟子、喉音稍寬闊。四喜班に於いて孫怡雲と併稱された。

陸玉鳳　蘇州人。張二奎の弟子。崑旦と皮黃青衣とを兼ね、初め雙奎班に、後春臺班に出演した。「昭君出塞」「佳期拷紅」「遊園」「南天門」「牧羊卷」「桑園寄子」等を得意とし、悲劇に長じた身材嬌小にして凝艶の態あり、歌喉に哀怨の聲が多かつた。韓家潭に錫慶堂私寓を營んだ。一門に名優多く雙玉、華雲、杏林等の小生皆彼の弟、子、甥、である。

羅巧福　梅巧齡と同學。字は笑仙、北京人。青衣で花旦をも兼ね演じ、四喜班で張二奎の片腕であつたこと。恰度今日の梅蘭芳と王鳳卿のやうな關係である。「四郎探母」「紅三關」「蘆花河」「教子」等が得意。嗓音は時小福、余紫雲よりも高く、且つ哈哈腔を用ふることを喜んだので、同業者は彼を嘎々旦と呼んだ。扮相は秀縵華麗兩つながらそのよろしきを得、體態も亦修短度に合してゐた。子二長は丑の名家羅百歲、次は現存老旦羅福山である。

王彩林　字は耀庭亦四喜班の名青衣。江蘇淸江浦の人。その二子は今日大名鼎々の王瑤卿、王鳳卿兄弟である。

王桂林　字燕仙四喜班の崑旦で、小生の名手王桂官の兄である。

喬鄭香　字は蕙蘭、前淸供奉の崑旦。梅蘭芳が「黛玉葬花」を初めて演ずるや彼の爲に崑曲を唱つた。現存崑旦の第一人である。樊增祥氏の「葬花曲」に、「是誰歌曲繡簾傍、四十年前喬鄭香、洛下璧人今老大、覇城金狄幾星霜」とあるは、卽ち彼のことである。

葉忠興　四喜班の名淨葉忠定の弟。江蘇人。小金奎科班出身で後四喜、勝春各班に出演した。「彩樓配」「探母」等。色藝平庸大名を得るに至らなかつた。

戴韻芳　喬鄭香と同學。崑旦にして青衣小生を兼演した。現存旦角中眞實の力量あるもの。正樂社の敎師であつたこともあり、老生鈕玉庚、小生耿玉卿はその門に出でた。

孫樣棠　字藕香、俞菊笙の婿である。菊笙の御氣に入りで、彼亦之に事ふること頗るつとめた。その子は卽ち武生小振庭である。

孫怡雲　朱雲素陸華雲と共に三雲と稱せられた。造詣陳德霖にも劣らずといはれたが、腔調陳に及ばざること遠い。前清末までは出演してゐたが今は隱れて出でない。尙小雲とは師弟の關係かある。

孫喜雲　怡雲の弟。扮相はよくないが唱工には取るべき點がある。「武家坡」「桑園會」「硃砂痣」「浣紗記」等が得意。

張子仙　陳德霖と同時代の靑衣。嗓音尖銳に過ぐ。

陳子芳　票友にして余紫雲を學び、深く堂奧に入つてゐる。「戲鳳」「醉酒」等は典型的のものである。譚鑫培「戲鳳」を演ずるや、紫雲子芳以外の俳優を配角としなかつた位である。現にすでに六十餘歲。

陳德霖　現存靑衣にして典型純正なる第一人陳德霖は、名鈞璋、字麓畔、漱雲又は漱芳と號し、小名を石頭といつた。同治元年九月九日に生れた。原籍京兆。前淸宦家の家柄である。祖父世濤は山東靑州の副都統であつたといふ。父は山東武定府で米屋をやつてゐた。母藤氏も北京人。妹二人のうち一人は名丑趙仙舫に一人は名武生張長保(前出)に嫁した。

父の死後、母は子女五人を携さへて北京に歸つた。家道益々衰へたので、德霖十二歲の時三慶科班に入り程長庚の門生となり先づ崑旦を學んだ。楊月樓俞菊笙譚鑫培等は、皆彼と同輩である。この時の當り藝は「金山寺」「殺四門」だつたといふから、彼の初めて學んだのは刀馬旦であつたかと思はれる。三慶科班卒業後靑衣に改め、名遂に漸く顯はれ淸廷供奉の列に加はることが出來た。次いで阿片の癖に染み咽喉少しく衰へた。時に孫怡雲漸く頭角を露はし、名却つて德霖の上に出でたので、德霖は大いに發奮し、阿片を禁じて嗓音の恢復を謀り、「雁門關」の一劇西太后に認められ、名又振ふ。次いで又三慶班に入り楊月樓盧勝奎黃潤甫劉�三と共に演じた。

民國後老成の凋謝するが中に、彼のみは一人益益進步し、終に靑衣の泰斗となつた。名優梅蘭芳王瑤卿王琴儂王蕙芳尙小雲程艷秋姚玉芙等は、皆彼に師事し、彼を呼ぶに「老夫子」を以てしてゐる。現に年六十五歲嗓音の堅實なる、他人百萬之に倣ふけれど及ばない。妻は沈芷秋の娘。その歿するや時小福の娘を娶る。先妻の娘は余叔岩の妻になつてゐる。

得意の劇は「探母」(太后)「雁門關」「祭江」「罵殿」「祭塔」「孝義節」「宇宙鋒」「彩樓配」「敎子」等枚擧に遑なくよくするところの劇、實に三四百を下らないといふ。中にも「探母」の太后は、彼が淸廷

の供奉として宮中に出入し、西太后の一擧一動を習ひ、最よく彼女に似てゐるといふので、非常な人氣を博してゐる。崑曲は固より長ずるところ、「奇雙會」「昭君出塞」等。

德霖の孝行は有名なもので、科班にゐた頃、錢を得れば貯めて置き、一定の額に達すれば必ず持ち歸つて母に奉じた。父母相次いで逝くや悲しむこと度に過ぎ七日ならずして形毀骨立の如かつた。兄姉妹にもよく盡した。

王瑤卿　名は瑞霖、字は稺庭又は菊痴、本年四十五歳父は王彩林、弟に王鳳卿がある。幼にして武旦を學び久しからずして謝雙壽に就いて青衣を習つた。初め三慶班に、次いで福壽班に入つて許蔭棠と共に演じてゐたが、譚鑫培の同慶班で、青衣孫怡雲が喉を失し、立女形がなくなつたので譚は瑤卿を延いてその後任とした。

これは彼に取つて登龍門であつた。彼はかくて日に譚と「南天門」「武家坡」「汾河灣」の諸劇を演じ、珠聯璧合相得て益益彰はれ、瑤卿の名京國に滿ちた。同慶班解散後各班に出演し、民國後劉鴻昇等と東安市場に中華舞台を新設し、自から株主となつたこともある。

彼は音を失して後、青衣と花旦の間を行つたやうな一種の女形を演じ、それに適するやうな脚本を自から編した。名伶化裝譜に據ると「庚娘傳」「棋盤山」「穆天王」「萬里緣」等は、何れも彼の編したものであるといふ。其外彼の得意物としては、「福壽鏡」の腰元、「五彩輿」の馮蕙芳、「英雄傳」の十三妹、梅玉配の少夫人等有名である。又滿洲旗人に扮して酷肖し「雁門關」等の劇はそれに依つて名高い。

譚と合演すること久しく老生青衣劇たる「南天門」「珠簾寨」「汾河灣」「武家坡」等については他人の及びがたい特長を持つてゐるので、高慶奎貫大元王又宸等の老生は、彼について譚の特長を學び、女形の梅蘭芳尙小雲程艷秋王蕙芳榮蝶仙等は皆彼について教を請ひ、「混盒元」「福壽鏡」「梅玉配」等の連臺戯は、彼に非ざれば排編することが出來ない。彼は中年得意の際は頗る高傲であつたが、晩年變じて和靄となり、後進の誘導に努めて倦まない。

妻は名女形楊桂雲の女である。母郝氏は昨年六月病歿した。

彼は畫家李石君陳敷民兩氏を拜して師とし、菊を最得意としてゐる。劇界では美妙香に次ぐ妙手である。「菊部叢刊」にいふ。

「喉音甚だ佳、但し高亮は余紫雲に及ばず、圓潤は陳德霖に如かず、余陳二家を雜採し、作工は

專ら余紫雲を學んでゐる。

「彼の極盛時代は譚と「汾河灣」「打魚殺家」「武家坡」等を合演した時代である。譚と合演の「打魚殺家」は、今古劇中の神品である。嗓音敗れて後花衫劇に新生面を開き身段作工梅蘭芳等の及ばざるところである。」

凌霄漢閣主即ち徐彬彬氏は、「京師老伶工近紀」に於いて次の如く瑤卿を評してゐる。

「石頭(陳德霖)」の青衣は書家の顏柳の如く、純ばら中鋒を取る。瑤卿は東坡山谷に似、別に風格を具し、亦勝場を擅ま、にしてゐる。蓋し法を紫雲に取つて蘭芳の扁を啓いだものである。猶憶ふ民國二年、蘭芳中和園に於いて初めて混元盒を演じ、紅蟒に扮するや、瑤卿臺前に立ちて親しく照料をしてゐた。今榮蝶仙王蕙芳及び票友章小山亦之を宗としてゐる。

「瑤卿失音後花衫に改めたが、その後の瑤卿は又最初の瑤卿でない。少時姿尙中人に過ぎず、而して一種名貴氣盛、儼然貴族の風があつた。譚と共に淸廷に供奉し、青衣叫天の號があつた西太后甚だ之を眷し、賞を頒つ毎に心ず譚と同じかつた。今年事既に衰へ、蘭芳の聲譽日に逼浸し、その掩ふところとなつたが、もし出台すれば歷軸以前の劇を演ずることを肯んぜず、私蓄あり退くの余地を存するがために、他伶の如く身分を失するに至らない。

「既に嗓音を失するや、花衫を習つて刀馬旦を兼ね、又自から福壽鏡、花木蘭、庚娘傳、萬里緣等を編し、以て自から表見した(老沙場客曰く、花木蘭は實に今日梅蘭芳の名劇たる木蘭從軍の先驅をなすものである)。登場する毎に英姿爽朗念白淸潤做工老練、猶ほ特色が饒い。久しく譚と合演しなかつたが、民國元年天樂園で汾河灣を演じ、後第一舞臺で打魚殺家を演じた。觀客皆觀止を嘆じた。譚曰く矢張り瑤卿だと。」

「今の瑤卿は青衣でもなく花旦でもなく、而も卓然として一家を成してゐる。能仁寺、悅來店の十三妹最も出色、破洪州、延安關は做派少しく氣障に失し非難の聲が多い。登場の時常に顧盼自から喜び、自命不凡の態度があるがこれ彼の欠點である。」

周瘦廬氏は「霓裳影」に於いて評して曰く。

「瑤卿は青衣を習ひ、陶鎔變化して自から一家を成したものである。早年二進宮汾河灣、蘆花河等を以て顯はれ、中年譚と打魚殺家、珠簾寨を演じ人の稱するところとなる。失音後は長板坡、能仁寺等名あり、その旗婦に扮するや裝束極めて命婦の神を得てゐる。故に雁門關の一劇は、人

之を稱道して衰へない。」

第二節　劇壇の明星梅蘭芳

一

當代支那劇壇の明星梅蘭芳は、後援者たる綴玉軒同志の良苦なる用心に依り、今や青衣にも非ず、花旦にも非ざる一種新式の女形を完成せんとしつつある。假りに彼を「青衣」の章下におさめたのはその最利に學び、且つ本藝とするところが青衣であるからである。

梅蘭芳、名は瀾、字は畹華。江蘇泰州の人。祖父梅巧玲は崑旦の名手、別に傳あり。父二瑣は巧玲の次男で、字を竹芬といひ、亦青衣を唱つたが、肺を病み明治三十九年頃歿した(前出)。遺兒裙姉(一に群子)時に十二歲、四歲にして母を失ひ今又父に先立たれ。伯父卽ち巧玲の長男大鎖に養はれて長成した。大鎖、字は雨田、當時第一の胡弓彈きである。この裙姉こそ卽ち梅蘭芳である。後年の發跡を豫見させる程父二瑣に似た顏立ちの可愛いい兒であつた。七八歲から家學を承け二瑣逝き大鎖の家計も思はしくないので、裙姉は終に朱小芬の門に入ることになつた。小芬

は霞芬の子で、幼芬の兄に當る。時に韓家潭に雲和堂私寓を營んでゐたが、裙姉その弟子となり初めて蘭芳と名乘つた。

蘭芳少時性馴良、大家の閨秀も彼の如く溫婉なるはなかつた。朱幼芬は師匠の弟といふを笠に着て、屢々蘭芳をイヂメたが、蘭芳は少しも逆はらず、孜々として業をはげんだ。其後、葉春善に依つて喜連成科班の成立し、少年俳優二百餘人を包擁するや、蘭芳亦同班に入つて青衣を學んだ。同學に老生金絲紅、武生康喜壽青衣律喜雲、武旦兼小生雲中鳳、花旦兼刀馬旦元元旦架子花臉候喜瑞、丑小百歲等があり、蘭芳と同じく外から(附學)する者には老生貫大元、花臉小穆子等があつたが、容色に於いては蘭芳に及ぶものはなかつた。正樂育化會成立するに及んで私寓の禁止となり蘭芳の藝も亦成る。卽ち文明園中和園の聘を受け、各班に演唱したが、人は新進の彼を知らず、聲譽は甚だ大なりといふことが出來なかつた獨り樊增祥(樊山)、易順鼎(實甫卽ち哭庵)羅癭公、奭召南、馮耿光(幼薇)諸氏は蘭芳が巧玲の孫であるところから、特に之を挽立てた。幼薇最も蘭芳のために盡したために北蘆草園に住宅を營み、凡そ蘭芳のためには金を揮ふ土の如く、少しも吝惜しなかつた。蘭芳之を德とし、かつて人にいつて曰く、他人は我を愛するが實は我を知ら

ない。我を知る者はそれ馮侯かと。綴玉軒に於ける馮の地位はこれでも知るべきである。

二

民國になつて以來、蘭芳の名大いに噪ぎ、田際雲の經營する天樂園（前門外鮮魚口に在り今華樂園といふ）に出演するや、滿都の子女は彼の美に醉うてしまつた。易哭庵はその「萬古愁曲」に、一笑萬古の春、一啼萬古の愁と唱つた。まことに一たび彼の顏色を見んものと、舟車十里を遠しとせずして鮮魚口に日參するものもあり、殊に女子に甚だしいものがあつた。前門外長巷に丁といふ人の娘、蘭芳が劇場に通ふ時いつもその前を通るので、いつの間にか戀病となり、學校の事も怠たりがちで、一途に蘭芳を思ひ詰めたが、一日終に東安市場吉祥園の樂屋に行つて面會を申込んだ。ボーイがそれを拒絶すると彼女は「自分は蘭芳の許嫁である。妻が夫に會ふのに何を邪魔するか」とばかりボーイの頰げたを叩きつけたので大騒ぎとなり、蘭芳に聞くと許嫁などは決してないと答へたので、劇場では娘を警察に引きわたした。その娘は家に引取られたが、日夜蘭芳のところへ嫁したいと啼きつづけるので、兩親は弱つてしまひ、遠方へ緣づけてしまつたといふ珍談もある。蘭芳爲人溫婉にして媚骨あり、ものいふ毎に兩頰潮紅し、一たび化粧して舞台に出るときは、人をして雄たり雌たるを辨ぜざらしむるものがある（小幡前駐支公使かつて支那側の招待で梅蘭芳を觀歸つて奇麗な女優だといつて笑はれたことがある）。故に彼は男女兩性の觀客の精神上の目標となり之を避けるのにいらない苦勞をしなければならなかつた。

また雲和堂にゐた頃、世家の子に郭連仙といふがあつた。年わづかに弱冠、容貌頗る俊美、略々蘭芳の如くであつたが、蘭芳を一見してより必身傾倒し、常に劇場の門に待つて蘭芳の車に乘るのを注視し、大風雪の日と雖も一日も怠たらなかつた。落花情あり、蘭芳も亦彼の誠心誠意に感じ、郭生終に入幕の賓となる。民國二年正月十二日、郭生と蘭芳とは相携へて香廠に遊び、薄暮煤市街の致美樓で夕食を認めてゐると、突如として例の曹錕師團の掠奪が起り、滿市鼎沸の狀を呈した。二人の少年は恐ろしさに聲も出でず、致美樓の一室に相擁して哭泣し曉に達したが、幸ひに致美樓は安全無事であつた。これより彼等二人の感情愈々深かつたが、後有力者のために隔てられてしまつた。

三

國會開けて議員入京するや、旅居のつれづれに彼等は八大胡同に走るか、芝居を見に行くかしたが、天樂園に於ける蘭芳の美に驚き嘆じて絶世の美人となし、大總統選擧のことあるや、蘭芳に一票を投じたものがあつた位であつた。

民國二年第一舞台落成するや、その經理は辭を卑うして蘭芳を聘した。蘭芳の意稍々動いたと見て、天樂園主田際雲は、こは一大事とばかり慌だしく蘭芳の家に行き、君朝に行かば天樂園は夕に倒れん、君請ふ行く勿れと。蘭芳之を憐れみ第一舞台には半年後行くことにした。暫らくして第一舞台は、內訌のため事業振はず、偶々其事上海丹桂園の偵知するところとなり、その特派員は蘭芳及び王鳳卿を聘して南下しやうとした。蘭芳は之を機會として田際雲の羈絆を脱しやうとし、田に諾つたところが、田も半年といふ約束であつたので今更承知せぬ譯にも行かず、その請を許し致美樓で祖道の宴を張つた。時に「一人あり室外から頻りに蘭芳を注視し、少しも動かない。蘭芳はうつむいて閉口しきつてゐる。同席者は大いに怒つて之を追拂つたが去らない。終に

蘭芳のボーイ某が拳骨を揮つたので逃げ去つた。彼は王といふ醫者で、蘭芳の父と識合ひだといふ口實でシツコク蘭芳に交際を求めてゐたものであつた。

越へて數日、蘭芳は終に南下した。時に彼の年まさに十九歳。

上海に於ける彼の成功を敍するに先だち、ここに一寸記して置かなくてならぬのは當時に於ける蘭芳の眞實の藝術である。彼の容貌は勿論超群絶倫であつたに相違ない。然しその藝は純粹の青衣としても完成せられてはゐなかつた。そこで彼の後援者たる馮耿光、李宣倜、齋如山、許伯明、舒石父、吳震修、胡伯平の諸名流は、蘭芳後援會を組織して之を綴玉軒と名づけ、專ら彼を指導するに努めた此團體は今日も猶依然として存在してゐる。

さて蘭芳は終に上海丹桂園に現はれた。當時上海劇界に於ける女形の牛耳を握つてゐたのは河南秦腔花旦に出身した賈璧雲であつたが、綺年玉貌の蘭芳には到底及ばない。上は名士より下は野鷄(卽ち娼妓)に至るまで、顚倒傾覆まさに狂するが如くであつた。蘭芳上海に出演すること四十餘日。

四

時に樊增祥(樊山)氏上海に在り、梅のために「梅郎曲」といふを製した。次の如し。

梅郎盛名冠京師。纔可十九二十時。繡絲底是佳公子。傳粉居然好女兒。海上歌臺封故步。拂絃
難得周郎顧。遂走金台選妙伶。左瞟史炳知何處。梅郎嬌小建章鶯。巧轉春風第一聲。東園仙花
是儂姓。左徒香草是儂名。渠儂家在韓潭住。姓名傳遍江南路。丹桂園中第一台。須第一人作錢
樹。吳天飛下鳳凰雛。朝陽一鳴萬目注。霓裳法曲世間無。錦擲繦頭不知數。吳兒聽郎歌。金鴈
斜飛喚奈何。吳姬見郎舞。含情欲語防鸚鵡。沈醉江南士女心。衣襟總帶梅花譜。豈知郎意重老
成。傳語樊山問安否。易五寄我瓊瑤音。道郎美慧知我深。采雲兩曲略上口。零樓一夢屢沈吟。
癸丑冬月初七日。郎來引入芝蘭室。渡江洗馬無此容。瓊樹一枝照瑤席。不言早識玉性情。微笑
如聞花氣息。執經即是張雕武。學詩顧從黃魯直。翻笑世家無子弟。未入學堂知法律。我如汝年
遊上京。汝祖椒掖皆知名。後來復見汝諸父。研光帽底花奴鼓。十年來去景和堂。一朶朱霞映門
戶。南台御史李會稽。親將第一仙人許。倘教霞川今尚存。定奪錦袍來乞汝。是日盡醉酒家樓。

鳳卿素雲皆汝儔。合爲白玉連環樣。同引珍珠一串喉。夜入梨園第一部。聽郎清歌見郎舞。萬人
如海看紅妝。萬炬無煙照海棠。纔揭繡簾猶掩抑。徐登錦毯故回翔。腰支一捻靈和柳。學得筱錢
堂下走。看似輕盈極端重。纔欲收光更遲久。燕去紅襟雙剪齊。鶯來一點黃金溜。引吭歛黛歌一
聲。齒牙伶俐絲清管。聲聲到底有旋折。字字入耳俱分明。促節緊打催花鼓。曼音細咽雲和笙。
竹雲初過玉初振。潛氣內轉丹九成。歌聲九變俄復貫。鎖骨觀音法身現。錦勒羅襦不動塵。微微
頭上宮花顫。吁嗟乎。九流百家俱本末。此郎佳處玉在璞。徒於歌舞去賞音。皮相固知非伯樂。
琴書靜對兩忘言。淡似幽蘭馴似鶴。專問才技何是言。以外有餘方是學。我見梅郎如領醇。吳中
但說好伶倫。亦如七十樊山老。祗把文章動世人。

蘭芳は空前の聲譽を荷つて北京に歸り、こんどは拔目なき經營者俞振庭の强要するところとな
り、文明吉祥兩園で演じてゐた。

五

水際だつた美貌(李釋戡氏は最近の著「蘭芳小傳」で「民國二三年間。藝乃大進色亦愈豔。容光煥

發。俯仰如神。」と形容してゐる。)と日に進む藝術とを以て、蘭芳が京劇界に獨歩しつつある間に綴玉軒同志は早くも蘭芳の將來を慮かり、一個の獨立した役柄として行詰りつつある「青衣」の一局に、彼蘭芳を彷徨させることを不利なりとした。彼等にこのヒントを與へたものは、之を遠くして余紫雲、近くは王瑤卿の藝術であつた。元來女形は、女としての種種相を具現しなければならない。その善良なる一面のみを演ずる役柄として「青衣」なる型を作り、それを範疇として一歩も其外に出でゝはならないといふ制限を附するのは、俳優の能力を局限するものである。綴玉軒同志はかく思考し、蘭芳のために幾種かの新脚本を提供した。その第一のものは「嫦娥奔月」であつたと記憶するが、之を型の方からいへば歌舞劇であり、之を扮相服裝の方からいへば古裝劇である。「嫦娥奔月」に續いて現はれたのは「黛玉葬花」であり、更に「天女散花」出づるに及んで、古裝歌舞劇に一新時代を劃したと稱せられる。以上の諸劇は綴玉軒の中堅たる李釋戡、齊如山、吳震修諸氏の手に成れるもので羅慶公も與づかつてゐるといふ。

張聊子氏は蘭芳の歌舞劇につき、民國七年八月頃、「最近之中國戲曲觀」に於いて次のやうに評してゐる。

純粹の新劇は社會に號令するに足らず。於是乎新排戲起る。その事實や新、その情節や新、その編成や新、而も一切の排場に於いては伏して舊劇の麾下に走らざるを得ざるなり。蓋しその名は新排戲と稱すと雖、唱工や鑼鼓や一一舊戲の法を取らざるなし。此種の劇は新舊過渡時代の產物と見るべく、而して現在その最聲名あるものは梅蘭芳の歌舞劇なり。例へば「天女散花」「嫦娥奔月」「黛玉葬花」「蘇姑獻壽」の類皆是れなり。此外「鄧霞姑」「童女斬蛇」の劇も亦蘭芳の編むところ、既に時裝を施すと雖唱工あり優鼓あり。則ち終に純粹の新劇たる能はず。梅は現在劇界に於いて盛名ある人なり。彼の偉大なる魔力を以て、彼の玉貌珠喉を以て、新劇を編成せんとせるは、詢に一時の風動、萬首攢望の盛況なり、而も彼終に舊套を脫する能はず。舊劇勢力の重厚なる、以て想ひ見るべし。

六

歌舞古裝劇に於いて空前の成功を得た蘭芳は、傍ら崑曲の研究に志し、その方面でも相當の成を擧げてゐる。民國六七年の頃、野台戲から京劇に復活して來た韓世昌一派の崑七班の影響も

あるが、蘭芳の恰悧なる、此新學の方面にも可成りの進歩を示した。故に今日北京劇壇の女形にして崑曲を善くせざるものは名優たるの資格なしと稱せられてゐる。

けれども何といつても歌舞古裝劇の魔力は頗る大であり、一昨年以來の梅の新作も「洛神」「西施」等に見るが如く、矢張り歌舞劇であり又「霸王別姬」「紅線盜盒」の如き「劍の舞」を主とした劇も大分受けてゐる。

さて順風に帆を揚げた蘭芳は、其後もあくまで幸運であつた。民國八年わが帝劇の聘に應じ、十二日間演唱したことは、支那劇壇空前の現象であつた。彼の演じた劇は、「天女散花」「黛玉葬花」「御碑亭」「虹霓關」「貴妃醉酒」「琴挑」等であつたと記憶する。

日本から歸つて後、益益新曲の研究に努め、民國十一年はじめて香港に出演し、彼地人士の熱狂的歡迎を受けた。民國十二年上海の聘を受けた時の給料は實に一月一萬五千元（旅費滯在費は其外）であつた。昨年五月再び帝劇との約成り、十月東渡し、歸途寶塚歌劇場でも演じた。

蘭芳の家庭は祖母陳氏（崑曲名優陳壽峯の妹）は巧玲の妻で、昨年六月十二日八十五歳で病歿した。家政は伯母即ち梅大鎖の妻が執つてゐる。妻は王氏、武生王毓樓の妹である。妾福芝芳は女優青衣として二流筆頭位のところであつた。

李釋戡氏の「蘭芳小傳」に曰く

性溫婉謙和、恂々儒雅從無疾言厲色。與人交久而能敬。平居相對。如飲醇醪。不期而醉。聞人譽已。恒謙仰不敢當。而人愈重之。喜文字。恒與當代名士遊。樊山實甫。交相愛重。一新劇出。每作詩歌以張之。實甫客死都下。賻以鉅金。樊山謂其有祖風。演劇助賑百餘次捐金萬計。旁及日本震災好施不惜。平少世俗嗜好惟愛藏書畫。究心繪事。其精撫佛像。足入冬心之室。今年供奉內廷。賜古月軒珍品。且命爲廟首。召見養成殿。都人傳爲佳話。九月二十四日。爲三十生朝。門人發東徵文。海內名流。詩文題贈空筴笥。錚裾雅集。極一時之勝。於戲盛矣。夫人材缺乏。未有如今日者也。苟有一技。即可成名。況協律世家。天賦美質。益以聰穎好學。能於藝壇獨樹一幟。如蘭芳者乎。余識蘭芳二十年。每與譚藝。即如越女之論劍。曰。妾非受於人也。而忽自得之過從既久。重其爲人。所以著之於篇者。歌世知人貴自立。芝草醴泉。固不必求諸士大夫也。

梅蘭芳についてはまだ記すべきところが多いが、村田烏江氏の「支那劇と梅蘭芳」や、穆辰公氏の「梅蘭芳外史」などの成書あり、これ位に止めて擱筆する。

尙小雲　梅蘭芳に次ぐ人氣俳優で寧ろ陳德霖の脈を延いた藝風を持つてゐる。尙小雲字は綺霞漢軍旗人の家柄で、淸初の藩王尙可喜の後裔であるといふ。曾祖父は雲南で、武官をやつてゐたし、祖父は定遠縣知事であつた。父の代になつてから家衰ろへ、某郡王府の役人となつてゐた。父が前淸光緒三十一年歿した時、小雲年僅かに九歳。母は彼と其弟富霞とを抱へて困つてゐたが、偶々父の友人で李際良といふものが、三樂科班(後正樂社と改む)を經營してゐたので賴んで入社させた。李際良はかの有名な西太后氣に入りの宦官李連英の甥だといふ。小雲容貌端麗、恰かも旦角の選であるので、際良は張芷荃、戴韻芳二老優を延いて靑衣を學ばせた。藝成りて民樂園に演じたが、中軸以前に唱つてゐたので人知るものなし。偶々劇評家穆辰公氏(當時國華報編輯、今盛京時報に在り)は、初めて彼の「彩樓配」を聽き、此子將來の造詣はかり知るべからずとなし極力彼のために鼓吹した。これより彼の聲譽漸くあがり、白牡丹に代つて正樂社の牛耳を執つた。時に名靑衣孫怡雲(前出)すでに音を失して琴師となり彼のために弦を操り、彼もそれに依つて益するところが多かつた。民國四年、孫菊仙上海から入京し、小雲の歌を聽いて嘆じて曰く、何ぞその小子和に似たるやと。小子和は即ち馮春航で菊仙が一手玉成した名旦である。即ち小雲と共に「敎子」その他二三劇を演じ、小雲の名依つて以て大いに彰はれた。十七歳正樂社を卒業、同社解散後各班に演唱し、陳德霖王瑤卿路三寶等の宿角に就いて業を問ひ遂に大名を成した。民國六年上海に出演し、七年又天蟾舞臺に招かれ、當りを取つた。今年二十七歳。

彼は純粹な靑衣で、咽喉のいいことは陳德霖は別とし、彼現劇界の第一人である。此點梅蘭芳も程艶秋も遠く及ばない。從つて「祭塔」「祭江」等純粹の唱工劇は、彼の獨擅場である。容貌端正にして半點輕佻の氣なく、最も靑衣としての身分に合してゐる。

辻聽花氏は最彼の爲人を喜び、提携頗る努めてゐる。劇壇の佳話として誰知らぬものはない。妻は名淨李壽山の娘である。弟富霞は富連成科班出身の花旦であるが、到底乃兄ほどの人氣はない。

程艶秋　尙小雲を陳德霖の後繼者とすれば、程艶秋は王瑤卿の後繼者であらう。北京の正黃旗人、字は玉霜、本年二十二歳。刀馬旦榮蝶仙の弟子であつて、その北京の劇壇に現はれたのは、

民國六七年の頃であつた。其後藝年と共に進み、殊に梅蘭芳の門に投じ、その提掖を受けてからは、順風に帆を揚げた觀がある。近頃は王瑤卿と提携し、その指導を受けてゐる。又羅癯公の後援に依り、種種の新らしい脚本を作つて貰つてゐる。有名なる「紅拂傳」以下、「花筵慊」「玉獅墜」「全本蘆花河」「花舫緣」等、一劇出づる毎に梅をも壓倒せん人氣である。容貌邪氣なく、娘役として北京第一。「樊江關」の一劇には、彼の特長が深く現はれてゐるやうである。

吳彩霞　字は幼卿、江蘇吳縣の人、本年四十六歳。吳巧福の子である。初め劉趕三、黄潤甫、李鑫甫等諸名優と小丹桂班に隷し、頗る盛名を負うてゐた。倒嗓後家居してその恢復に努めてゐたが、上海に行つてから名大いに揚がり、殊に劉鴻昇と提携して相共に演唱すること六年、嗓少しも衰へず。鴻昇歿後北京各班に演じてゐるが、年不惑を越へ扮相悪しきため受けない。子少霞はもと老生、倒嗓後許德義の門に入つて武生を習ひ、吳彦衡と改名して一昨年華樂園に現はれたが、一向駄目である。娘は名花旦白牡丹の妻となつてゐる。

王琴儂　名文鵬、字は桐君。原籍浙江山陰縣、本年三十九歳。幼にして田寶琳に學び、嗓晉極めて佳。家道富裕なために舞臺に出ないが、陳德霖は彼の嗓を北京第一と折紙をつけ、陳の得意とする純粋の唱工劇である「武昭關」「二進宮」「孝義節」等を強いて學ばせた。以て王の眞價を察すべきである。民國元年田際雲の首唱で正樂育化會成立するや琴儂も事に參して力があつた。劇界での名望家で、總統府などで俳優を呼んで演劇する時など、彼がその世話方である。繪を善くし蝴蝶最佳。

楊韻芳　前清時代有名な相公であつた。初め陸華雲の門に入つて小生を學び、後青衣に改めた。民國の初めにはまだ出てゐたが、近頃は隱れて出ない。

朱幼芬　字は桐琴、霞芬の子である。幼にして色藝絶倫、民國になつても一時は蘭芳、惠芳と併稱されたこともある。家富み演唱せず。

歐陽予倩　湖南瀏陽の人で本年三十六歳。日本に留學中新劇を研究し、春柳社を結んだ同志中の一人である。歸國後上海を根據として舊劇を學び、青衣として充分立つて行ける樣になつた。學問があるので脚本作者としても知られ、南通州の張謇氏が伶棺學校を設立するや、聘せられてその校長となつた。南北劇界を通じての新人である。

姚玉芙　前清時代有名な相公で、湯頤公氏の「香夢影」にいふところの孝伶阿順は卽ち彼のこと

である。幼時老生を學び、後青衣に改めた。民國の初、袁世凱の第一の乾兒であつた趙秉鈞の愛顧を受け、滙文書院に入つて英文を學んでゐたが、趙死し又伶籍に入り、梅蘭芳の弟子となつた。扮相唱工共に大した事はない。今は梅のマネヂヤーとして余り舞台に現はれない。

李連貞　富連成科班の出身で、正樂社の尙小雲と併稱せられた。冀州人、字慧卿。初め武旦を學んだが體力續かずして青衣に改めた性狷介、工愁善病、最悲劇に長じてゐた。世論は彼を以て第二の朱幼芬に擬したが、語、識をなして今日蛇尾振はないことになつた。

胡素仙　名は二麗、幼時色を以て賞せられた。長じて青衣を業とし、中等の材であつた。民國四五年以後登臺せず。

伍月華　上海で名のあつた青衣であるが、體肥滿して扮相がよくない。唱工は先づ可成りである。

律喜雲　喜連成出身、扮相よからず、今配角に淪んでゐる。

律佩芳　亦配角青衣にして小生を兼ぬ。律喜雲の弟である。

小喜祿　上海の配角青衣。

石灝玉　正樂社に尙小雲より遲れて出臺し、扮相絶佳、將來の造詣測るべからずと評せられたが、不幸民國十三年早世した。

陳碧雲　亦尙小雲時代の正樂社青衣、扮相よからず久しからずして配角となつた。

李素雲　天津人。秦腔青衣から二黃に改め、上海に出演した。

沈飄香　沈韻秋の子。花旦から青衣に改めた。配角。

李琴仙　はじめ孩兒紅といつた花臉で呂月樵の弟子後伍月華の門に入り青衣を學んだ。配角。

伍鳳春　伍月華の子。老生から青衣に改む。

趙芝香　青衣趙寶珠の子で、張芷荃(前出)の弟子である。幼にして青衣を學び性頗る聰穎、凡そ青衣の重頭劇にして演じ能はざるものがない。純粹の青衣としては吳彩霞と併稱される。ただ扮相が頗るよくないので、一生運が惡い。氣の毒な俳優である。

趙菊芳　名肇騰、字は則儂。年二十七歳。かつて中學に學んだこともある。十五歳票友となり早くも舞台に現はれたが、後暫らくして廢業し、兄に從つて醫を學んだ。兄はむしろ俳優たらんことを勸め、吳凌仙を師として益々藝をはげみ近頃朱素雲の門に入つて劇界への復活を志してゐ

る。故周瘦鵞に從へば彼は時小福を學び、「祭塔」「祭江」「落花園」「二進宮」を能くすることに於いては陳德霖尙小雲外の第一人であると。

徐碧雲　名小生徐寶芬の第四子で、本年二十一歲。兪振庭の斌慶科班で武旦を習ひ、昨年卒業するや青衣に改め、聲譽忽ちあがつたが一婦人との關係から捕縛され、牢に投ぜられた。三ケ月で出獄し、今引込んでゐる。聰明無類、將來有望である。扮相はあまりよくない。大兄蘭元は梅蘭芳の胡弓彈き。三兄斌壽は斌慶科班で小生を習つたが下手だ。姉は貫大元の妻。妹は王少樓に嫁する事になつてゐる。自身も梅蘭芳の妹を貰つた。彼の入獄事件は、その當時大分騷がれ、彼の一生もこれで棒に振らなくてはならぬかとも思はれたが、今日から見れば大した打擊でもなく今一二年辛抱すれば復活は六かしくあるまい。

吳富琴　字慧中、北京人で花臉吳玉林の子。十二歲にして富連成社に入り秦腔青衣を習つたが、後同社で秦腔を廢したので二黃青衣に改め、李連貞倒嗓の後を繼いで同社の台柱となつたが、二年ならずして亦倒嗓した。扮相は仲仲いいが、咽喉はまだ恢復せず。後程艶秋の約を受け、その配角となつてゐる。

程艷秋　艶秋の兄で本年二十五歲。民國十一年頃から靑衣を學び、一年後にはもう出台して唱つてゐる。無論弟程の天分はない。

兪步蘭　兪振庭の子。十三歲父の經營する斌慶社に入り、初め武旦を學び後靑衣に改む。陳德霖李寶琴を師とし、振庭は一生懸命になつてゐるが天分の限るところ大したことも望まれない。扮相殊に惡し。

胖寶琴　孫彩珠の弟子である。體が肥へてゐるので人綽名して胖寶琴といふ。滿洲婦人に扮して雍容華貴の態觀るべし。故に「雁門關」「四郎探母」の蕭太后、「珠簾寨」の皇娘等、並世無兩と稱せられた。宣統元年頃病歿した。

杜富興　現に富連成科班の學生。本年二十歲。旗人梅蘭芳派の靑衣で、少年俳優中の錚々たるものである。「武家坡」「汾河灣」「黛玉葬花」「嫦娥奔月」等が得意である。

章小山　票友靑衣の領袖である。王瑤卿を學び、談吐風韻神肖のところが多い。尊むべきは瑤卿晩年の趣を得たのみならず、中年の奧妙を傳へてゐることである。又「醉酒」「馬上緣」等の類をもよく演ずる。扮相がよくないのは缺點である。

蔣君稼　江蘇常州人。蔣維喬（號竹莊、江蘇教育廳長）氏の甥である。票友青衣。よくするところの劇は多くないが藝は精である。扮相娟秀、程艷秋と相匹敵する位である。「戲鳳」「女起解」「孝挑」等得意である。

樊杏初　熙春會票房の名青衣である。陳德霖を學んで頗る心得ありと稱せられてゐる。「戰蒲關」「孝義節」「落花園」「二進宮」「蘆花河」等が得意である。

來伴琴　票友青衣中資格最老の者。時小福を學んでその神似を得、兼ねて小生を學び、直ちに徐小香を期し、その音清越激楚、餘人の及ぶところでない。青衣劇の「二進宮」「孝感天」、小生劇の「鎭擅州」「打金枝」等。

趙劍禪　舒子寬の弟子である。嗓音奇佳。「玉堂春」「祭塔」「六月雪」等が十八番能くするところの劇は多くはないが皆精妙。後起票友青衣の巨擘である。

田少俊　王瑤卿を學んで得るところあり、唱念作共に佳であるが、惜しむらくは扮相惡しく、俗受けがしない。

林鈞甫　春陽友會の票友で、初め武旦を習つたが、後青衣を學ぶ。年三十にして容貌衰へず。「小放牛」「醉酒」「穆柯寨」「娘子軍」「金山寺」等その十八番である。殊に「小放牛」は最有名である。

郭效汾　德珺如の弟子である。本年二十二歲。扮相趙菊芳と相若き、端正である。民國九年頃出台。「女起解」等が得意。郭は名門の出であると。

第四節　秦腔青衣

崔靈芝　皮黃全盛時代の前に秦腔の全盛時代があつた。秦腔の重な役柄は、老生青衣花旦の三ツであるがその老生には郭寶臣、楊寶珍、薛固久等があり、花旦には侯俊山、田際雲等があり、青衣としては崔靈芝等がある。女優には小香水、金鋼鑽等が有名である。秦腔青衣の唱は哀怨悲凉。最悲劇に適してゐ、日本人にして初めて支那劇を聽く人は、多くこの秦腔青衣を喜ぶやうである。

崔靈芝字は松林、少年時代は石工であつたといふ。（或人は彼が相當の學歷を有つてゐるやうに筆者に敎へたがどうも疑はしい。）容貌端莊、最も悲劇に適してゐる。此役柄に於いて盛名を持續すること數十年、秦腔の衰微に伴ひ、大柵欄で演ずることが出來ず、彼自身も暫らく隱退してゐ

たが數年前同業の勸めを容れ、同業の苦境を救ふために再び天橋に現はれた。彼は一面脚本作家として、他面劇場經營者として、非凡な腕前を持つて居り、他の皮黄の劇場の起伏常なき中に、彼の經營する劇場のみは數年に亘つて演唱し、毫も中絶等のことがない。獨り秦腔青衣のみならず、秦腔全體の今日猶滅びざる、全く彼の力である。彼年すでに五十前後、容貌は流石に衰へたが、歌喉一に舊の好く實に皮黄の陳德霖と併稱するに足る。得意の劇は「妻黨同惡報」「玉堂春」「回荆州」「哭長城」等である。

蓋陝西　京津一帶に久しく聲名を現はし、郭寶臣、崔靈芝等の副であつた。「韓琪殺廟」「回荆州」「玉虎墜」「蝴蝶盃」等が十八番である。

周詠棠　上海を根據として相當の歡迎を受けた俳優である。得意の劇は「回荆州」「燒骨計」「南天門」等。

金靈芝　民國四五年の頃正樂社に出演し、秦腔花旦、芙蓉草の後を承けて名があつた。時に年僅かに十五六歲。嗓音の激越なること崔靈芝外の第一人で、一時の人氣は大したものであつたが、後その師匠について外江を打つて廻り、名現はれない。「玉堂春」「女起解」「回荆州」「春秋配」等。

「花旦劇」をも演じ「辛安驛」「鎖雲襄」等佳。

芙蓉草　金靈芝の前北京で有名で、花旦兼青衣。上海に下つてから非常な歡迎を受け、「女蝴蝶」の主人公として名があつた、梅蘭芳の渡日に際し隨行し、後南通張謇氏の伶棺學校に歐陽予倩の副として雇はれて行つた。

小香水　郭寶臣崔靈芝一派の山陝梆子漸く衰微し、魏聯陞等の天津梆子勢を得るや、新興の女優にして之を學ぶもの多く、近頃は秦腔青衣は殆んど女優の專賣となつてゐる。而して女優秦腔青衣の元老は即ち小香水である。本名は李佩雲、直隸寶抵の人。初め武生を學んで東三省一帶に名があつた。後花旦に改めたが、扮相端重にて妖冶の態をなすに適せず、終に青衣に改め、老生をも兼ねた天津を根據とし、魏聯陞(元々紅)と「南天門」「桑園會」等を合演し旗鼓相當ると稱せられ、盛名を持續すること十餘年。中年後嗓音少しく衰へたがよく邊音を用ひ、「十萬金」等の悲劇を演じ、凄厲哀惋嗚咽愈々人を動かすを覺えしめた。作派傳神の妙も年と俱に進み、後この絶技を挾んで入京するや秦腔青衣第一たるの定評が出來た得意の劇は「十萬金」「桑園會」「南天門」等。老生劇としての「轅門斬子」「回荆州」「四郎探母」「蝴蝶盃」などは、私等は青衣劇以上だと思つてる

る。「斬子」の楊延昭は、就中彼女の傑作であつて、眉宇軒朗絶俗、八賢王と爭論する時、嚴厲の色之を望んで凜然たるものがあり、擧止の間落々大方小家の氣象を雜へず、聲調の蒼凉悲壯なる眞に唾壺を擊碎するの慨がある。實に空前の傑作である。今年すでに老い、天津に隱れて久しく登台しない。

小榮福　小香水と異り調子のごくやはらかい、天津梆子らしい唱ひ方で、その方の領袖であつた。

金鋼鑽　小香水と久しく相追隨し、最よくその特長を得ると共に、一面小榮福の藝風を傳へ、殊に容貌の可憐にして端正、如何にも青衣らしい顏つきをしてゐる點からして、小香水の後を繼いで非常な人氣を獲得した。皮黃青衣に於ける尙小雲にも比すべきであらう。惜しむらくば氣力單薄に失し、「十萬金」等の劇は終に小香水に及ばない。得意の劇は「三娘教子」「玉堂春」等。

孫桂秋　天津人。小香水小榮福に追隨して名があつた。今年老い終に北京に入らない。

杜雲紅　民國元二年の頃北京で非常な人氣があり、「雲紅集」など出版された位であつた。一たび人に嫁し後又出臺したが、もはや過去の人物である。

劉鳳仙　金鋼鑽と同時代の俳優。後李準の妾となる。

張喜鈴　民國九年後頭角を露はした。今北京にゐない。

第五章　花　旦

第一節　梅巧玲から路三寶まで

梅巧玲　梅蘭芳の祖父である。名は芳、字は慧仙、一に雪芬といふ。貧を以て伶籍に入り、崑旦を業とした。貌磧肥にして美、唱作念一も佳ならざるなく、胖巧玲といふ綽名があつた。かつて「盤絲洞」を演じた時裸體になる一幕があるが、その膚豐潤玉の如く、人をして楊貴妃清華池沐浴の圖を想起せしめた。得意の劇は「雁門關」の蕭后、「盤絲洞」の蜘蛛精、「閨房樂」の管夫人等である（周瘦廬氏「霓裳影」に據る）。かつて一たび四喜班を掌つたこともある。巧玲色固より艶、而して性は殊に任俠であり、姓が梅であるので梅花を酷嗜した。李鐵拐斜街に景和堂私寓を營なみ、名士の出入が多かつた樊增祥氏等はその最たるものであつた。ある南方人重金を挾んで入京し、巧玲を見て之を重んじ數年にして金盡きたのみならず、鉅萬の負債を殘して死んだ。債權者は日にその家を圍んで債務をハタリ、棺桶を持ち去ることを許さない。巧玲之を憐れみ、その家に哭し、悉くその債務を償ひ、二百金を遺族に贈つて葬を全くせしめた。輕薄な梨園にかつてなき義擧だといふので、巧玲の名は一時に揚つた。光緒の初年家に歿す。子二、長大鎖卽ち雨田次二鎖卽ち梅蘭芳の父である。

張雲亭　字永霖、蘇州の人、四喜班の崑旦である。發音吐詞協律合聲、韻調亦悠揚宛轉珠玉盤に落つるが如くであつた、「賣子」「投淵」「痴夢」「撥水」「降告」「陽告」等の悲劇に長じ、幽情苦緒みなよく嬌喉を以て節々譜出し、人之を聞いて「曲終人不見、江上數峯青」の感があつた。後身體肥滿して扮相少しく衰へたが、聲は依然たるものであつた。清廷で官宦に崑曲を教へ、その教頭であつた。子芷荃（前出）青衣として名があつた。

魏長生　嘯亭雜錄に秦腔を北京に首創した俳優として出てゐる。

王湘雲　魏長生の後を繼いだもの。亦秦腔花旦。湖北沔陽の人。性幽邁にして繪畫を善くし、殊に蘭が得意であつた。後廢業して商人となり、巨富となつた。

方松林　事績を詳かにせず。同治元年歿したといふ記錄が殘つてゐる。

王長桂　事績不詳。光緒二年歿。

田桂鳳　字桐秋、北京の人、花旦として古今の第一人である。今日の梅蘭芳稍之に近しと稱せられる位。余紫雲(青衣、前出)と同時代である。同治から光緒の初めにかけては、その名汪桂芬譚鑫培の上にあり、一たびは劇壇の盟主となつた名優である。これまで花旦を以て大軸を演じたものはなかつたが、彼「關王廟」「送灰麵」等の劇を以て、譚の後に演じ、而も觀客の去るものなしといふ人氣である。梅巧玲楊桂雲以下、花旦は多く豐艶を以て稱せられたが、彼は清麗を以て現はれ燕瘦一流に近かつた。ただその眼が、美は美であるが少しく兇光を露はしてゐるのが缺點といへば缺點であつた。最得意とするは「閨門旦」の方面であつて「紅鸞喜」とか「拾玉鐲」とかいふ類である。口白頗る流利。かつて某總督の邸で「烏龍院」を演じた時、總督が五加皮酒が好きなことを知り、劇中の白に「我不會吃酒、今晨多飲幾杯早酒、酒言酒語冒犯尊駕」といふ句があるが、彼は此「早酒」を改めて「五加皮」とやつたものだ。總督は目をパチクリしながら「可惡可惡」を連發したといふ。光緒中年以後は常演せず。古玩を好み富を致した。その人猶在り時に義務劇などで演ずるが容貌は無論衰へたが藝は流石に立派なものである。

侯俊山　即ち老十三旦である。名は喜麟、張家口の人である。原籍は山西。幼時貧にして俳優となり、秦腔花旦を學ぶ。十三歳にして聲名を馳せ、即ち稱して十三旦といふ。或はいふ旦角には十三の類がある。俊山は之を皆よくするのでそれで十三旦といふのであると。長ずるに及び色藝愈々顯はれ、京師に入るや、忽ちにして顯貴の間に名喧びすしく、久しからずして清廷に供奉となり。特に光緒帝の殊遇を蒙つた。秦腔の名優にして供奉となつたのは彼が初めである。當時「狀元三年一個、十三旦蓋世無雙」といふ語があつた。某大官俊山と善く、彼の爲に初め男裝の女賊、後に美人の本性を現はす劇を作つてやつた。それが例の「新安驛」である。後藝愈々進み南北に出演して聲名衰へず終に富家翁となつて張家口に隱れてゐる。本年六十九歳だが、舞台に上れば二十餘歳にしか見えない。實に人妖と稱すべきものである。秦腔花旦劇以外、「伐子都」「八大錘」等の武小生劇に當りを取つた。美貌のために艶聞多く、その點で多少非難がある。

田際雲　侯俊山に次いで秦腔花旦の牛耳を執つたものに田際雲がある。田、小名虎、長じて瑞蟒と改め、別號を想九霄といふ(此綽名の由來は後に詳述する)。直隷高陽の人。父玉陞は定興縣で雜貨商をやつてゐて小金を持つてゐた。際雲生れて美天人の如く、性聰慧、村塾に於いて彼に過ぐるものはなかつた。幼にして劇を好み鎭守の社で芝居があるときには、數十里を往返して觀

に行き、歸つて歌へばよく節に合した。涿縣白塔村の鄉紳趙某が雙順科班を經營するや、趙は玉陞と義兄弟であるので、際雲の美を見て迎へて班に入れたが、果して一班の冠たる成績を擧げた。時に際雲年十二歲幾くもなく東太后の喪に遭ひ、雙順班解散と共に、趙は際雲等を携さへて北京に入り、崇文門外東曉市の紅廟に寓し、毎日糧食店の梨園會館で淸唱(正式の演劇にあらず)をやつた。次いで熱河に在ること二年、返つて天津に演じて當りを取つた。上海金桂園主は彼の名を聽き、毎月百兩の給料で當年十五歲の際雲を聘した。在滬二年。當時の當り藝は「春秋配」「蝴蝶盃」等であつた。暫らくして黃月山、達子紅、孫彩珠、陸小芬、譚鑫培等も同園に入り、當時の金桂園は實に上海戲園の冠たるものであつた。

偶々北京瑞勝班の台柱(大黑柱)侯俊山は、大官の妾某との艶事が露顯し、北京追放を喰つたので、彼は班主に際雲を勸めた。班主は武德泉といふものを遣はして際雲を迎へ、際雲は老生楊寶珍と共に北京に入り之と「美龍鎭」「海潮珠」等を合演し、名大いに彰はれた。後二年自から小玉成班を作つたが、次いで又上海に行き天成茶園で汪桂芬、萬盞燈一陣風等と一緒に演じた。又暫らくして丹桂園で一班を組織したが、結果は思はしくなく、半年にして缺損數千金に及んだ。際雲よつて「佛門點元」「錯中錯」等を新作し、人氣これがために一振した。既にして又「斗牛宮」の一劇を排した。これは彼の得意劇中の得意劇で、彼は此劇中の九天仙女に扮し其顏色の美九天仙女と雖ども之に過ぎずといふので、想九霄といふ綽名を上海人からつけられた。五年にして歸京、大玉成班を作る。その網羅せる名優には黃月山、一陣風、楊寶珍、張黑、李吉瑞、夏月恒あり秦腔と徽班と一班に演ずるの例を作つた。

偶々時小福は梨園會會首であつたが、此時病歿したので、內務府大臣は田際雲を其後任とし、內廷供奉に任じた。幾くもなく戊戌政變が起り、康有爲梁啓超海外に亡命し、知名の士にして慘害せられたものが多かつた。初め光緒帝は維新の意あり、康梁等六人を擢んでて小軍機とし、保國會を建立した。一時の士大夫の新知識あるもの皆之に隷した。田際雲は內廷の供奉として官宦と懇意であるので、光緒帝と西太后との仲の惡い實情を知悉し、光緒帝に大いに同情した。帝は新學の書籍を讀みたい希望を有してゐられたが、警戒嚴重にして仲仲その便りがない。ところが流石の西太后も、俳優は無識のものだと氣を許し、際雲等は自由に帝のところに出入出來たので、帝は際雲に依賴して書を讀むことが出來た。康梁も此點で大いに際雲の功勞を認め、一歩を進め

て彼を帝と新黨との聯絡係に命じた。

政變起るや、際雲も上海に逃れたが、後西太后に赦されて歸京し依然內廷供奉となつた。此時太后の旨に依つて想九霄を改めて響九簫とした。瀆神の嫌があるからといふのである。光緒二十七年（明治三十四年）天樂園を再建し、小吉祥科班を起した。羅小寶陳葵香等之に隷す。光緒末年、阿片禁止の運動が起つたが、際雲も票友喬盡臣等と戒烟會を發起し、演劇して二萬金を得、それに依つて戒烟したもの數千に及んだと。

光緒三十一年（明治三十八年）杭州駐防旗人惠興女士が學校を起すために資金補助を將軍瑞徵に上書したが、瑞が之を取合はなかつたので、惠女士は毒を仰いで事に殉じた。際雲は此事に感激し、福壽堂に此事を仕組んだ劇を演じ、自から惠女子に扮し、大當りを取つた。當日の入場料三千六百元は日昇銀號の手を經て杭州に送り、女士の學校は此金に依つて直つたといふ。

彼は私寓の制を以て伶界の恥となし、之を廢せんことを上書した（宣統三年）が呈未だ上らざるに際し私寓有力者のために阻まれ、その賄賂を受けた御史某に誣ひられ、「革命黨と通じ、新劇を編し官附を辱罵した」といふ罪名で百日入獄した。民國成立するや、彼初志を貫いて私寓禁止を

請願し終に成功した。又女優の娼業兼營禁止をも請願し、これも許可された。

私寓及び女優の娼業禁止に成功した際雲は、又楊桂雲余玉琴王琴儂孫佩亭等の同志と共に俳優團體として正樂育化會を創立し、譚鑫培會長に、際雲副會長に當選した。民國三年湖北省水災の際には、際雲等の主唱で第一舞臺に義務劇を演じ一萬余元の收入があつた。其後崇雅社といふ女優の科班を設立したが、この方は大した成績もあげ得なかつた。今家居優遊自適してゐる。本年六十三歲。子雨農武生としていい材料であつたが不幸早世した（前出）。

徐彬彬氏の「京師老伶工近記」に次のやうな逸話が出てゐる。

「際雲かつて譚鑫培と「翠屏山」を合演した時、譚に謂つて曰く、自分は皮黃も唱へるが、御前は梆子が唱へるかと。譚卽ち梆子を唱つて之に配したと。」

張聊子氏の「想九霄談」にいふ。

「民國成立後女優初めて都に入り、新進の勢力一時に盛んであつた。而して個中の翹楚は梆子の花旦その大部分を占めてゐた。際雲も梆子花旦であるが、女優に壓せられて之を嫉視し、女優と男優と合演することの禁令を政府に請うた。ところが男女分演後、女優は益益盛んになつたので、

際雲もその勢力の無視すべからざるを知り、終に女優科班崇雅社を創立した。彼の進取に勇なる一般が偲ばれる。」

「際雲はかつて直隷省議會議員となつた。袁世凱は之を聞き、際雲でさへ省議員になれるなら、譚は大總統の資があると謂つたと。」

「崇雅社は女優の科班としては比較的規模あり、一般の女優と相距ること遠い。」

「彼の作つた名劇に封神榜といふがある。全本連台三十四本、盛夏六月といへども大入滿員で、三ヶ月間打續けたこともある。今日では狸猫換太子など珍らしいことではなからうが、當時としては稀れに見るところであつた。」

「文廷式學士はどういふ譯か際雲を喜ばず、罵つて忘八旦といつたが、想九霄の忘八旦とは天成の妙語だと評判した。」

「際雲は新知識あり、頭腦も亦鋭敏に過ぐるものがあつた。脚本作者としても有名である。近頃の劇界で經營の才あるは、彼と俞振庭の二人である。彼老い、振庭今盛んに彼のなすところに倣ひ科班創立などを試みてゐる。劇界の進歩は此二人に負ふところが多い。」

楊桂雲　字朶仙、安徽の人。父某は四喜班の武旦で時に名があつた。所謂武旦楊二は卽ちこれである。桂雲はその長子。原名を榮樹といひ、花旦として淫奔猥褻の狀をなすに長じてゐた。「雙鈴記」「雙釘計」等の劇は、狼厲淫蕩、古今の第一人である。かつてその子小朶と共に雙搖會を演じ、時論「父子爭風」としてこれを譏つた。桂雲身小にして肥へ、面に慘厲の色を含んでゐた。故に淫戲に於いて他人の及びがたい特色を持つてゐた。自分もその特徴を知つてゐるので、他の俳優は皆堂會に出演するが、彼のみは決して之に應じない。自分の劇は女子が見てはいけないといふ理由からである。俳優を業とする卅年私寓を以て厚利を獲、產鉅萬を以て計へた。百順胡同の德春私寓は、自から主人となり、子小朶が少主人となり一時名流巨公の集まるものが多かつた。民國二年桂雲その孫小小朶を護して天津に行き、歸途小小朶の帽子が風に吹き飛ばされたので桂雲汽車から降りてそれを拾つてゐる間に、汽車が出てしまつた。やむを得ず徒步して歸京したが身體が肥へてゐるので大に疲れ、病氣となり、民國三年病歿した。桂雲爲人極めて開通時事を談ずることを好み、民國元年田際雲余玉琴等と正樂育化會を發起した。新聞を讀むことが好きで、室は新聞で一杯で桂雲その間にチンと控へ、一見政治家のやうであつたと。娘は王瑤卿に嫁した。

楊小朶　桂雲の長子、名は懋麟、字は孝亭「盤絲洞」「閨房樂」「五彩輿」等が得意、父の十八番である「雙釘計」等も演る。大體父の藝を傳へ、容貌は父以上。相公としては殊に有名で南人方候銓なるもの、產を蕩してその入幕の賓となり、「願爲小朶門前狗、不作江西七品官」と放言したこともある。阿片を好み、顏色衰へ、少年時代と別人のやうになつた。理財を善くし、百順胡同附近に澤山の家屋を所有して居り、梨園第一の富豪と稱せられる。子寶忠、初め小小朶といひ、老生として有望であつた。倒嗓後家居靜養すること數年。今又寶忠の本名で復活した。

梨園佳話に曰く、小朶はよく父業を繼ぎ、花旦を以て世に稱せられたりといへども、藝は父に及ばず、但し貌は父に過ぎ、一富麗の女子に類すと。

小朶民國十一年(?)病歿。

朱霞芬　幼芬小芬の父である。

朱小芬　幼芬の兄、雲和堂私寓の主人で、梅蘭芳の最初の師として知られてゐる。

秦稺芬　卽ち秦五九である。王憲芳の師である。國興私寓の少主人で、楊小朶と併稱された。

楊桂雲の衣鉢を傳へ、「雙釘計」等に當りを取つた。後張蔭桓に落籍せられ、その邸に住んでゐた。

張は奇癖のある男で五九を少奶々と稱し、召使にもさう呼ばせた。召使もはじめは可笑しかつたが、女裝してゐる五九を見てゐるうちに、奶々と呼ぶことに不自然を感じなくなつたといふ話も殘つてゐる。張の新疆に流されるに及び、五九も張邸を出、晩年氣狂ひになつてゐた。一昨年か狂疾大いに發し、出刄庖刀で妻君を殺したが何かで捕へられた。

郭際雲　藝名水仙花。倩雲私寓の主人で、「醉酒」「刺巴杰」「梅玉配」等が得意であつた。老莊の劇を嗜み、楊小樓と莫逆の交を訂してゐた。楊の女婿劉硯芳は郭の弟子である。郭、後瘋疾を以て死す。

一汪水　姓名を詳かにしない。北京のある金店の丁稚であつたが、貌美にして心流蕩、好んで婦人の裝をしたので、一層役者になれといふので花旦を學んだ。目波韶秀にして體淸潤、故に人綽名して一汪水といつた。「賣胭脂」「戰宛城」等が得意であつた。一時は田桂鳳の次に位したこともあるといふ(梨園佳話)。

姚佩秋　前淸時代有名の相公。閨門旦に長じ、「紅鸞嬉」等見るべし。第一舞臺の發起人として知られる。

姚佩蘭　佩秋の弟。

姚佩霞　佩蘭の弟。

路三寶　河南出身、或はいふ山東人であると。字は玉珊、楊小朶と併稱せられた花旦であるが、貌は小朶に及ばず、而も藝の博いことは併世無兩であつた。楊桂雲のやうな芝居も出來るし刀馬旦もいけるし、小生までもやつた。「醉酒」などは水仙花と彼を數へる位である。其他「採花赴府」「穆柯寨」「馬思遠」「雙釘計」「樊江關」等得意とされる。田桂鳳の後を承け、譚鑫培と「烏龍院」等を合演した。容貌で賣らず、藝で賣つた俳優であるから、盛名を持續する事も長かつた。もし今生きてゐたら、花旦中の陳德霖であつたらう。

第二節　現存諸優

王蕙芳　王蕙芳字は湘浦、名武淨王樊桂の孫、四喜班の武生王楽寶の第二子である。本年三十六歲。山東省瑯琊の人。幼にして雲和堂に隷し、又た秦稈芬を拜して師とした。貌溫雅韶秀、最大家の令嬢の風あり。業成り福壽堂で初めて賈洪林と「遊龍戲鳳」を合演し、評判を取つた。後花旦路三寶、小生陸杏林の教を受け、實勝和班が慶樂園に在つたとき、蕙芳は楊小樓と共に同班に入り、名稍々顯はれた。文明園落成するに及び、俞振庭の請を容れて出台し、劉鴻昇と「烏龍院」等を合演し名大いに振ふ。時に年僅かに十八。王瑤卿から「全本雁門關」等を得たのも此頃である。太平和班に轉じ、次いで上海丹桂第一台の聘に就き、歸京後梅蘭芳孟小如田雨農等と天樂園に出演した。これ民國二三年頃のことである。次いで南京に出演し、月餘にして歸京、陳德霖に師事して青衣を學んだ。第一舞臺で王鳳卿と「武家坡」「汾河灣」等を合演し好評を得た。「女起解」「樊江關」「荀灌娘」等に彼の家藏の祕本があつたが、彼は惜まず之を瑤卿蘭芳等に分ち與へた。民國九年漢口和記大舞臺の聘に應じ、座頭として自から一班を組織したこともある。爾後常に登臺せず、年齒亦漸く長じ、世人に忘れられやうとしてゐるのは惜しい。當年蘭芳と併稱された美貌の持主だけに、今日といへども榮蝶仙等に優る萬々である。彼の藝風は溫文幽雅にして、毫もアバズレの點なく、極めて上品であるが、惡くいへば熱がない。是れが人氣を失つて來た原因であらう。性頗る剛爽、滑稽を善くし一言を發する毎に人をして抱腹せしめる。時として鐵拳を振ふこともあるので、友人は彼を「黃天霸」と綽名してゐる。天樂園時代王某なるものが蘭芳の跡をつ

けて蘭芳甚だ迷惑してゐるのを見て、ヨシ來たとばかりピストルを某につきつけ、此次見附けたら擊ち殺すといつたので、某は生命からがら逃げたといふ逸話もある。酒が好きで、嗓子が時々惡るくなるのはそのためだといふ。陳敷民の敎を受け、蘭の繪に巧みである。小鳥を飼ふことも好きである。王琴儂の妹を娶つて子少芳を擧げたが、不幸病死したので又梅蘭芳の妹を娶つた。少芳はすでに十二歳娃々生として方々に出演してゐる。蕙芳は故張勳の第一の御氣に入りであつた。

賈璧雲　河南花旦の出身で、北京から轉じて上海に土着した俳優である。一時北の梅蘭芳、南の賈璧雲と併稱されたものである。蘭芳を梅の花とすれば、璧雲は桃の花である。艶を以て勝り、媚を以て優れてゐる。而も年齒稍々梅より長じ、今漸く老大、すでに過去の人物たる觀がある。

毛韻珂　名は仲林、少珊と號す。上海旦角の元老張國泰の得意の弟子で、もと七盞燈といつてゐた。もと老生を學び、次いで花臉、小生を兼ね、聲變りの後花旦に改め、漸くその適所を見出した觀がある。今武生老旦に扮することもある。新劇にも長じ、洋裝女子に扮してこなし頗るよし。多才多藝なるは上海旦角の第一人である。賈璧雲に次ぐ聲望を得てゐる。眼神最美しく、支那の劇評家は水銀の流動するが如しと評してゐる。最近體肥へ扮相少しく讓る。

馮子和　字は春航、上海人で本年四十一歳。孫菊仙の弟子である。花旦を以て青衣を兼ね、特に新劇に長じてゐた。もはや過去の人物である。

趙君玉　乳名小馬、趙小廉の子である。少年老生を以て花臉を兼ね、聲變りの後武生、次いで青衣花旦に改めた。梅賈毛馮等の長を盜み、小器用な女形として知られてゐる。

林犨卿　名は霖、字は雨林、本年三十五歳。福建興化縣人。父林寶恒といひ、矢張り俳優である。初め徐丹林に從つて武丑を習ひ、林小芬と稱して出台してゐたが、聲變り後張國泰の門に入り花旦を學び、居然趙君玉に次ぐと稱せられた。民國四年頃北京に入り大いに歡迎を受けた。南方俳優にして北京に容れられたのは、彼を以て初めとする。扮相は惡くないが、鼻の大きいのが欠點。性至孝友情に厚いと。

小楊月樓　初め老生として名あり、聲變り後花旦となる。多才多藝、趙君玉型の俳優である。

高秋犨　北京人で秦腔花旦の出身。もと粉菊花といつた俳優である。後上海に土着して二黃花旦となり、引續き相當の人氣を得てゐる。近頃は二黃青衣をもやるやうである。

劉小衡　名淨劉永春の子で、大連時代老生として鳴らしたが、後花旦となる。

佳楣　小桂枝の弟子、十年前上海有名の女形であつた。柔靡人に勝る。

小翠花　姓は于、名は桂森、字を紹卿といふ。連泉は其科名である。本年二十六歳。原籍山東登州府人。父を海泉といひ、都察院の小役人をしてゐた。翠花九歳にして鳴盛和班に入り、盛琴といふ藝名を持つてゐた。鳴盛和班は名女形水仙花の經營してゐたものである。翌年卒業吉祥天樂諸劇場に出演したが、民國元年同班の解散と共に、同二年富連成科班に入り、蕭長華郭春山等に指導せられて藝益々進む。六年三月卒業後も、暫らく同社に留まつて演じてゐたが、七年同社を離れ、吉祥園等で演じた。九年漢口上海の聘に就き、十年漸やく歸京。王蕙芳隱れてより後、彼は終に北京花旦の第一人である。得意の劇は「醉酒」「戲鳳」「坐樓」「斷橋」「得意緣」「馬上緣」「戰宛城」「虹霓關」「樊江關」「閨房樂」「雙鈴計」等。彼の容貌は最現代式で、尙小雲と正反對である。善笑嬰寧の綽名がある。名小生陸華雲の娘を娶り、宣武門外西草廠胡同に住んでゐる。

白牡丹　姓は荀、名は詞字慧聲又は慧生。直隷省東光の人。龐啓發の門に入つて秦腔花旦を習ひ、正樂社に附學し青衣の尙小雲と併稱された。後援者は白社を作つて彼と提携したが、邦人村田孜郎、古澤憲介兩氏はその中堅であつた。次いで二黃を學び、上海に出演して居然大歡迎を受け、時論小翠花の下に在らずとした。北京では、小翠花の方が評判がいいが、上海ではむしろ白牡丹の方が受けてゐる。容貌は白牡丹の方が上、尤も好き好きではあるが。妻は名青衣吳彩霞の娘である。

綠牡丹　本名黃玉麟、字瑞生貴州人。本年十八歳。咸少英の門に入り上海天津著名の花旦である。本年初めて入京し、「風塵三俠」「龍女牧羊」等の劇を以て歡迎を受けた。南方俳優にして北京に入り終始好評を博したのは彼位のものである。小生金仲仁の娘と結婚した。昨年六月咸の門を出、本名黃玉麟に歸つた。村松梢風氏と交際あり、その御蔭で邦人にもよく知られてゐる。

黃潤卿　北京人。かつて春慶科班で老生を習つたが聲變り後。中學校に入り卒業後路三寶の門に入つて花旦を學んだ。容貌王瑤卿に似て頗る貴族的。藝は今一息といふところである。王蕙芳の妹を妻としてゐる。

朱琴心　名は琇、杏卿と號す。本年二十四歳。浙江省湖州の人。父は商人で母を金氏といひ、彼を上海で產んだ。十五歳上海青年會で英文を習ひ、十七歳のとき來京して協和醫院のタイピス

トになつた。少年時代から劇が好きで、北京に來てから各票房に出入し、花旦兼青衣として盛名を負うた。昨年劇評家汪俠公氏等の勸誘に依り下海し、正式に俳優となつた。容貌は左程でもないが、女になりきつてゐる點では目下北京劇界に於ける女形としては有數である。學問があるので芝居の筋がよく分り、從つて做が上手である。「鬧學」「花鼓」「閨房樂」等が彼の十八番である。

現住東單羊肉胡同三號。

諸如香　字は茜、浙江の原籍で本年三十五歲。姜妙香陳葵香と師を同じうし、初め老生を唱つたが顯はれず、花旦に改めた。嗓音極めてよく、尙小雲程艶秋等と「五花洞」等の劇を合演するや針鋒相對し、尙程等も殆んど受太刀になる位である、惜しむらくば扮相端莊の氣少く、終に青衣たるに適しないことである。或人は酷評して二等妓女の如しといつた。第二流花旦として第一の椅子を占めるものは實に彼である。近年頗る自から振ひ、徐々にその地位を向上させつつあるのは感心である。

陸鳳琴　崑老生陸長林を祖父とし、名丑陸金桂を父とし、小名鎖兒、幼にして楊小朶の德春堂に隷し、貌娟秀にして性柔婉、小吉祥科班で花旦を歌ひ、名があつた。後體肥滿し、扮相衰へた。陸建章に愛せられ、その陝西督軍時代隨行して行つた。歸京後南方藝妓某なるもの、陸の貌に迷ひ、澤山の持參金を以て彼に嫁した。

劉鳳林　陸と同じ位の地位を占めてゐる。扮相は陸より一層劣る。經營者側に廻り、天橋での有力者であるといふ。

高月霞　正樂社出身の花旦、貌揚がらず白牡丹に壓倒され、今名聞へず。

蔡連卿　北京及び近郊一帶で新劇を打つて廻り、相當人氣がある。

小桂花　本名計斌慧字は瑞芬、眉君と號す。山東萊州府人、本年二十歲。斌慶科班出身で小翠花を宗としてゐる。容貌はあまりよくない。小翠花の妹婿。「花鼓」「醉酒」「虹霓關」等佳。

小馬五　秦腔花旦として俗受けの旗頭である。直隷滄州の回教徒で、降準秀目淫蕩の態寒心すべきものがあつた。得意の劇は「紡棉花」で、流行歌の大鼓を入れ、當時の北京人には初耳だつたので大喝采を博した。これは馬五の創作であると許り信ぜられてゐたが、實は彼が天津から輸入したものであつた。あまり人氣があつたので同業者に嫉まれ「紡棉花」は淫戯だと稱し、官憲に運動するものを生じ、爲に同劇は禁戯となつた。そこで彼は又一新機軸を開き「溪皇莊」「虬蜡廟」等

の武劇で何でもない端役に扮し、例に依つて太鼓を入れ前に劣らぬ人氣を得た、その人尙在り、天橋の舞臺で臺柱となつてゐる。

周憲芳　舊名小桃紅。上海で潘月樵王永利王(憲芳の兄)等と義兄弟となり、特に王永利と仲がよかつた。王は上海の劇界で覇王といはれた有力者で憲芳は彼の御蔭で上海で流行つた。後民國四五年頃、林鍔卿の後を承けて北京に入り、一知半解の新劇で都人を煙に捲いたが、次いで張家口に行つて御定まり通り人の妾との色事が發覺し、投獄された。後終るところを知らず。

李荔秋　小名官兒、玖笑旦を得意とて、長身玉立妖艶の態見るべし。「打麵缸」「王小二過年」等。

潘海秋　潘月樵の子、初め小黎青といつた老生。聲變り後花旦に改む。平凡。

郭少蘭　又郭蝶仙といひ著名青衣郭秀華の子である。初め武生であつた。「紅梅閣」「醉酒」等。舉止輕佻。後姦通罪で逐はれた。

韓世昌　民國六年頃北京に崑曲が復活した。直隸の田舍を打つて廻つてゐた崑弋班が、漸く北京にその立脚地を見出すことになつたのである。郝振基、陶顯庭、侯益隆、陳榮會等、各其專門の役柄に於いて澁いところを見せたが、當今の觀劇家は色を重んじ藝を重んじないので、どうしても女形が中心とならざるを得ない。その選に當つたのが韓世昌である。字は君青、當時僅かに十六七歳。鄉先輩の間に伍して一個無名の少年俳優であつたが、此氣運に育くまれ、忽ちにして名を京國に知られた。容貌可憐にして野菊の如く、身材嬌小、難をいへば少しく土臭あるを憾みとするが、先づ造るべきの材であつた。得意の劇は「闖學」「思凡」「刺虎」「刺梁」等である。崑曲好きの文人學生に評判がよい。

第三節　女優　月旦

楊翠喜　天津の女優。容貌は平凡であつたけれども長身玉立、弱柳風を迎ふるが如く、姿がよかつた。鹽商王某の妾となる。後親貴某(慶親王の子載振貝子)に歸した。その仲介者がたしか段芝貴であつたと思ふ。硬骨の御史趙啓霖が、此事實を具して慶親王を彈劾してより楊翠喜の名は誰知らぬものもない。彼女のためにはむしろ幸福であらう。

王克琴　喉音尖に過ぎ唱は頗る耳を刺す。「雙釘計」一類の劇を得意としてゐた。後張勳の妾となる。

金月梅　山西人で久しく南方に居り、柔媚蘇杭の佳麗の如くであつた。悲惋情致あるものに得意で、「獨占花魁」「杜十娘」等佳。後天津の俳優李長山に嫁す。今北京で有名な女優金少梅はその養女である。

小蘭芬　作派周到武功精熟、昔年名京津の間に溢れた。得意の劇は「入劈關」「新安驛」、武生としては「惡虎村」「連環套」「落馬湖」等である。

小桃　身段扮相共に佳。清末王克琴と併稱された。「打櫻桃」「小上坟」等佳。女優花旦にして皮黄を能くしたもの〻最初の一人である。

林黛玉　もとは上海の藝妓であつたといふ。「拾玉鐲」「紡棉花」「遺翠花」等佳。長江一帶に名があつた。

劉喜奎　直隸南皮の人、艶は桃李の如く冷は冰霜の如く、容貌の美は梅蘭芳と併稱するに足りた。民國三四年頃天津から北京に入り、空前の人氣を取つた。有名な老莊學者劉少少、時の參謀次長陸錦、名士易順鼎、參謀本部第二部長崔承熾などの諸氏は、彼女を中心として戀の競爭をやつた。例の張勳も好色心を出して妾にしたいと申込んだが首尾よく振られた。そのうちに彼女の出演してゐた大柵欄の三慶園から、彼女が一日歸宅しやうとして出て來たところを、或る馬匪者が待ち構へて强制接吻して五十元の罰金に處せられたといふやうな珍事件が起り、彼女の名前は益益知られた。好事のものは梅蘭芳を男の中で一等きれいな男、劉喜奎を女の中で一等きれいな女だから、二人が結婚したらよからうといふ噂を立て、それが眞實のことのやうに持てはやされ梅の家庭に問題が起りかけたことすらある。其後京津の間を打つて廻つてゐるうちに、前紀崔承熾と結婚し陸錦は戀に破れた腹立ちまぎれに崔を免職したが、崔は何をとばかり劉を連れて天津に隱れてゐた。崔民國十三年病歿。劉は寡を守つてゐる。

鮮靈芝　秦腔青衣丁靈芝の妻である。丁は崔靈芝、李靈芝と共に三靈芝と稱せられた俳優である。鮮は初め其弟子であつたのだ。民國四五年の頃天津から北京に入り劉喜奎金玉蘭と共に女優の三傑と稱せられた。然るに鮮の背後には夫丁靈芝の外に、楊韻甫といふ脚本作者があつて盛んに新脚本を作つて提供したので劉の美貌、金の技藝を以てして鮮に敵する能はず、劉金相繼いで都落ちを演じた位であつた。尤も此時鮮には張小仙といふ若手人氣役者がついてゐたことも彼女の成功に與かつて力があつた。名士易順鼎女優に於いては最鮮靈芝を愛し、彼女の眼神は一轉よ

く三百六十度に及ぶ、蕩の上なるものなりといつたことがある。夫丁靈芝は嫉妬深く、一日痴話喧嘩の末鮮は金を呑んで自殺しかかつたので大さはぎとなつた。それで暫らく舞臺を休み、再び出て來た時に演じたのが「翠屏山」無限の心事は不言不語の中に在りとか何とかいふ劈頭第一の白に、見物はただもうワツと來たものだつた。後金少梅出づるに及んで天津に下つた。もう過去の人物である。得意の劇は「王小二過年」「打魚藏舟」「鳳陽花鼓」及び楊韻甫の提供する新劇各種である。楊は目下慶樂園の秦鳳雲の黒幕となつて成功してゐる。

金玉蘭　劉喜奎鮮靈芝と相並んで、顏では劣るが藝では三人中一等シツカリしてゐると評せられて、中和園を守つて一歩も屈せなかつたのは金玉蘭であつた。亦秦腔花旦、大柄で豐艶、今日の琴雪芳の先驅であつた。得意の劇は「紅鸞禧」「新安驛」「蝴蝶盃」等。北京に出演したのは、民國二年頃からしい。そして第二革命の當時、彼女は革命の志士を隱匿した廉によつて彼女の情人たる楊某と共に銃殺されたといふ噂が立つた。都下の文人墨客は筆を揃へて彼女の死を弔した。中には其無根を唱へたものもあつたが、新聞に彼女の死刑を目擊したといふ一兵士の證言が載るに及んで事實の確不確は問題とならなくなつた。上海日報は「俠伶金玉蘭」といふみだしで彼女の最後を連載した。ところが何ぞ知らん彼女は天津の舞臺で得意の藝を演じてゐたのであらうとは。「天原不許生尤物、世竟公然殺美人」と某名士は此世態を笑つた。然し玉蘭は民國五年二十四歳で病歿した。

小月英　劉喜奎の副將格で中和園に出てゐた。「打櫻桃」「羅章跪樓」「樊江關」等が得意であつた。後劉と離れ、漢口に出演中、天然痘に罹つて死んだ。

金桂蓮　初め天津で有名であつた。後劉喜奎に隨て北京に入り、溫雅な容貌で大分受けてゐた。「小放牛」「翠屏山」「烏龍院」等佳。夭折。

馬素珍　回教徒の家に生れ、秦腔花旦及び刀馬旦に巧みで容貌流蕩。「雙鎖山」「小放牛」等佳。後張家口方面を打つて廻り、名漸やく聞へず。

張文艷　上海で近年非常に持て囃された女優で、文艷親王といふ綽名を奉つたものもある位。扮相嬌艷態度秀媚、「雙珠鳳」「美龍鎭」「打櫻桃」等が得意。

小素梅　劉喜奎北京を去つた後容色を以て北京に名のあつた秦腔花旦である。山東芝罘の人。疊花一現、終るところを知らない。

劉昭蓉　藝名を十三旦といふ。鮮靈芝の後を繼いで北京廣德樓に現はれ、女優の牛耳を執つてゐた。青衣花旦を兼ね、「貓貍換太子」等の所謂「本戲」を北京で演じたのは彼女が第一人である。顏は男優小翠花的で、藝の博いことは鮮靈芝後此優を推す。

金少梅　支那女優の元老金月梅(前出)の養女である。實父は清室の遺老にして當代の大詩人たる鄭孝胥氏で彼と八大胡同の姑娘との間に生れたのが彼女であるといふ。江順仙を師とし皮黃青衣花旦を兼ねてゐる。容貌可憐にして上品で、娘らしい。男優中の程艶秋に匹敵する。前廣東水師提督李準氏其他有力な後援者が澤山あり、「文君當鑑」其他彼女獨特の脚本がある。劇評家汪俠公氏作の傳記もある。其後上海に行き、濟南天津を經て歸京、目下遊藝園に出てゐる。琴雪芳碧雲霞と共に目下坤伶三傑の目があるが、そのうち少梅資格最古く、人氣は稍々下り坂である。

琴雪芳　姓は馬名は金鳳山東回教徒の娘である。上海で初めて七盞燈の弟子となり、香港方面を打つて廻り、民國十年頃城南遊藝園に招かれて北京に入つた。大柄の現代式美人である彼女は、藝は左程でもないが容貌を以て忽ち京中第一の評判を得た。時に小生を演ることもある。

碧雲霞　琴雪芳に對抗すべく慶樂園が上海から引張つて來たのが彼女である、容貌少梅雪芳に劣るが、藝は仲々よい。黎元洪吳景濂兩氏は大分ひいきにしてゐる。本姓は謝。

恩佩賢　恩曉峯の娘。男優林顰卿に似てゐる。大した代物ではない。馬連良の妻君になつた。

于紫仙　女優武生于紫雲の妹。秦腔花旦で藝は仲々達者である。流蕩の趣を得てゐる。

第六章　老　旦

譚叫天　譚鑫培の父である。聲叫天子の如くであつたので、叫天と綽名を呼ばれた。叫天子とは不祥の鳥で、善く啼きその聲悲しといふ、咸豐年間鄉里湖北から北京に入り、四喜部に隷した。

周老旦　光緒中葉の人。音寛泛にして隕味なきも、よく規矩を守ると稱せられた。

謝寶雲　名は世榮、號芷珊、小名昭兒。順天大興縣の旗人。初め崑旦花旦を學び、次いで老生に改め、更に老旦に改めた。老生時代の「金水橋」「二進宮」等は發音蒼秀にして高寒、譚鑫培汪桂芬の勝を兼ねてゐたといふ。中年以後嗓音破れたが、尙一劇中一二句の素的な唱があり、ために「謝一句」といふ綽名を得た位である。龔雲甫出つるに及び、壓せられて振はず、民國六年一月五十五歳を以て病歿した。

龔雲甫　老旦界の革命黨で、老生界に於ける劉鴻昇の地位を占めてゐる。名は世祥、北京人でもと玉器商人であつたが、聲が非常によかつたので劉桂慶に就いて老生を學び終に龔處と名乘つて舞臺に現はれた。時に孫菊仙四喜班を掌り老旦がなかつたので龔に老旦を學ばせた。その時の師匠が熊連喜であつた。然し彼は舊規に循ふことを潔しとせず、唱工に青衣の調を加へ身段に女性的の分子を加味し、一種の新らしい老旦を創成した。彼が一時「花老旦」と綽名されたのはこのためである。その唱工は棉遠蘊蓄抑揚頓挫に長じ、沈痛の致は掩ふところとならず剛健婀娜各その妙を極めた。老旦は京劇ではあまり重要ならざる役柄で、之を以て大軸壓軸を唱ふ者はなかつた。然るに雲甫一たび出でて老旦の地位略々老生に匹敵し、譚鑫培に對しても雲甫は多く讓らなかつた位である。民國以後阿片の癖に染み、嗓音稍々衰へたがそれと同時に他の役柄にも人材なく、今日嗓音を以て論ずれば青衣の陳德霖と彼とが雙璧である。得意の劇は頗る多い。「釣金龜」「行路哭靈」「徐母罵曹」「沙橋餞別」「遊六殿」「滑油山」等は就中その錚々たるものである。相當學問があるので口白は仲々立派である。本年六十四歳。

羅福山　名青衣羅巧福（前出）の子、名丑羅壽山の弟である。四喜班の老旦で藝崑亂を兼ねてゐたが、嗓よからず今配角に過ぎない。

文亮臣　旗人。票友出身二十歳にして初めて祥慶和班に入つて羅福山の弟子となつた。扮相ト

し。嗓子も仲々よいが韻味に乏しいのは欠點である。然し人材欠乏せる老旦界のことであり龔雲甫亡き後は羅福山の嗓音はあまりに低く、將來矢張り文亮臣が第一となるであらう。尤も臥雲居士の如き票友の傑物が本職になつて來たらば別である。

陳文啓　龔雲甫を學んで可成りの名があつたが、扮相老旦によろしからず、唱は清逸であつたが老生の氣味を脱せず、聲價一落千丈目下文亮臣にも及ばない。

文榮壽　德珺如の弟子である。中等の材、配角に過ぎない。

鄧麗峯　龔雲甫の弟子。扮相老旦にふさはしからず唱工も亦平平。中等の材。

臥雲居士　旗人。姓玉名銘冠、字敬臣。龔雲甫を學び嗓音絶佳。票友老旦の第一人である。雲甫老を以て常演せず、人は居士を第一樓に聽いて渴を慰してゐる「斷后」「六殿」等佳。

尙俊卿　十年前女優老旦の第一人。容貌端莊、品位に富む。旗人。後中和園主に嫁す。

陳雲濤　尙俊卿に次ぐ。

陳小賢　陳雲濤に次ぐ。

郭瑞卿　現在女優老旦の錚々たるもの。年少貌美、時に靑衣をやることもある。

第七章　武旦

楊二　名不明。安徽人で四喜班の武旦。藝崑亂を兼ねてゐた。楊桂雲の父である。

張芷芳　亦安徽人にして四喜班の武旦。張二奎の女婿である。體が肥滿し過ぎ扮相今日の九陣風に及ばざること遠し。

余玉琴　安徽省錢山の人名は潤卿、小名莊兒。父の余太海は邑の諸生で賢名があつた。繼母に容れられず逃れて上海に行き、貧を以て莊兒を俳優にした。初め丹桂園に出演、次いで蘇州抗州を始め長江各地を打つて廻り、光緒十二年北京に入り四喜班附となつた。「畫春園」「演火棍」「醉酒」「虹霓關」「十粒金丹」「兒女英雄傳」「德正方」「蕩寇志」「大賣藝」等歡迎された。光緒十五年福壽班を、十九年小福壽科班を作り、二十三年崇文門外に廣興園を建てた。彼は此時既に內廷供奉であり、最光緒帝の寵愛を蒙つてゐた。義和團事件起るや、亂を避けて上海廣東に行き、亂平ぐや河南に行いて西太后及び光緒帝を迎へ車駕に隨うて歸京した。爾後隆寵益益厚く、實に梨園の筆頭

であつた。宣統三年東安市場に丹桂園を創設、民國元年の兵變に燒かれたが、三年之を重建した。正樂育化會の成立にも與かつて功があつた。性至孝人望あり。他の嗜好はないが酒が好きである。

朱小喜　蘇州人。咸豐同治の間來京して四喜班に屬した。配角に過ぎない。

朱小元　朱素雲の父。詠秀私寓の主人。朱文英の師として知られてゐる。

朱文英　朱小喜の子。朱小元を師とし、武旦の輕業的の技術に巧みなので有名である。小名四十。「打瓜園」「取金陵」「蟠桃會」等。光緒の初內廷供奉となる。長男湘泉は第二流武生。次男は名武旦桂芳。娘は九陣風に嫁した。

八仙旦　武藝は頗る達者であるが容貌奇醜なるがために一生志を得なかつた。

兩陣風　秦腔班出身。藝は達者だが唱白に拙。

九陣風　本名閻嵐秋、青衣閻金福の長男。福壽科班出身。藝成り飛來鳳と名乘つて滿洲を打つて廻り、美貌を以て稱せられた。吉林の一寡婦彼のために焦れ死んだ位である。宣統初年歸京。「演大棍」「取金陵」「奪太倉」等を以て武旦第一人の定評を得た。今日と雖もそれに相違はないが、年齒長じ扮相衰へ、氣力も舊の如くならず、ややもすれば朱桂芳に凌駕されさうであるのは致し方もない。

朱桂芳　朱文英の子。幼名莊兒。父が四十と呼ばれたので彼は小四十ともいはれる。父の祕傳を受け藝大いに進み、宣統初年俞振庭と合演して名彰はれ、「取金陵」「娘子軍」等は父以上との評判容貌極めて端莊で王瑤卿一流の顏をしてゐる脊高く、表情に拙なのが缺點。近來は九陣風の退化すると共に彼武旦界の牛耳を執らうとしてゐる。

榮蝶仙　旗人。名は春善本年三十四歲。陸華雲の小長春科班に出身し、初め武生後文武花旦に改めた。彼を武旦とするのは些さか當を失するが、余玉琴の脈を引く意味に於いて此章に收めて置く。朱文英派の武旦ではない。彼の少時は名女形の輩出相繼ぎ、彼の名はあまり彰はれなかつたが近年同類の女形の凋落と共に返り咲きした。雌伏時代王瑤卿の敎を受け、「兒女英雄傳」等その衣鉢を受けてゐる。青衣の流行兒程艶秋は彼の弟子である。その妻は王瑤卿の姪である。

元元旦　本名高喜玉。或はいふ名は祥雲、字は少芝、通州の人、十二歲にして喜連成科班に入り十九歲卒業後南方を打つて廻つて評判を取つた。「娘子軍」「演火棍」等の武旦戲はいふに及ばず、「醉酒」等も得意である。一時は梅蘭芳路三寶九陣風の長を併せたといはれた位であるが、年長じ

色衰へ聲名漸く下る。

雲中鳳　元元旦の同期生後配角に淪む。

張蓮芬　富連成出身。民國四五年頃有名であつた。早死。

方連元　張蓮芬の後を繼ぎ、富連成武旦の領袖であつた。在科中は容貌頗る美であつたが、卒業後はその面影も見當らない。然し藝は取るべく、朱桂芳を次ぐものは彼だらうと評されてゐる。

劉連湘　張蓮芬と同期だつたと思ふ。色振はず、卒業後天橋あたりに出たりしてゐた。

邱富棠　富連成出身、方連元の後を繼ぎ、後には方以上の人氣を得てゐた。卒業後もいい口がないので同班に殘つてゐたが最近はゐない。

趙斌忠　俞振庭の斌慶社科班では、初め徐碧雲武旦の領袖となつてゐたが、徐卒業と共に趙斌忠がその後を承けた。

第八章　正　淨

第一節　淨の說明

一

普通に「生」「旦」「淨」「丑」と稱し、「淨」は「旦」に次ぐ役柄とせられてゐたが、それは大體論であつて、「淨」のうちにも「生」「旦」のあるもの以上の品位を有するものがある。尤も私は役柄に品位に依る順序などのあるべき筈はないと信じてゐるものである。が、ここでは假りに普通の解釋に從つて置く。

さて「淨」は、一口にいへば敵役である。然し左樣に簡單に定義出來ない事は細かに淨を以て扮する劇中の人物を調べて見ればよく判る。ただ男性の剛强なる性格を表現するものであることは間違ひない。それと今一ッは隈取りといふ特殊の技術を持つてゐる點に於いて他の役柄と區別出來る。淨を分つて左の三種とする、

（正名）	（別名）	（通稱）
正淨	文淨、黑頭	大花
	銅錘淨、大臉、	
	花面、大面	銅錘
		花臉
副淨	架子淨、二	架子
	葩面。二花	花臉
		二花臉
武淨	跌打淨、檸	武二
	打花臉	武花臉
	花臉	武二花

銅錘花臉に元老大臣宰相等に扮する役柄と普通に解釋されてゐる。然しこれは舊式な定義であつて、實際は左樣に簡單に片附けられない。一々劇中の人物に就いて考察し、實際に近いものを描き出す外ない。其代表的なものを擧ぐれば、宋の包拯、戰國時代の王僚、東漢の姚期、三國の姜維、司馬懿、晉の周處、唐の單雄信、尉遲恭、五代の高行周、宋の楊五郎、高旺、魯知深、明の徐延昭のやうなものである。

右に擧げた諸人と、副淨を以て扮する諸人とには、その性格に於いて本質的に何等の差異はない。否、同一人にして或場合には正淨たり、或場合には副淨たり、又或場合には武淨たり得るのである。然らば何を以てこの三者を分つかといふに銅錘花臉は唱工に重きを置き、武工なく、口白仕草身段には、唱工程重きを置かない。架子花臉は扮相氣魄を重んじ、做白に重きを置き、唱工はその次にしてゐる。武工は全然ないといふ譯ではないが、問題にする程でない。武淨は立廻り專問、卽ち武に屬し、銅錘架子兩花臉が文に屬するのと區別される。

細かに觀察すれば唱工は此三種の花臉に明白に區別がある。銅錘は洪鐘大呂の如く、架子は重濁沈悶なるべく、武淨は簡率なるを通例としてゐる。

二

架子花臉は最扮相氣魄を重んずる。これは京劇研究者の誰もが下した定義であるが、「架子」の一語、以て此間の意味合を表はすに足り、なほ做、白を重んずる役柄であることを暗示してありがある。支那語に所謂「擺架子」「架子大」の意味を以て副淨の副淨たる所以を悟ることが出來る。

唱は大體正淨のそれに類似してゐるが、ヨリ一層重く、濁り、錆び、「沈悶」と形容される程、低音のあらゆる澁味を出さなくてはならない。苟しくも輕浮であつてはならない。故にもし東西洋の音樂が分り、而も支那劇の門外漢である人が卒然として皮黄劇を聽いた時、低音の絶唱を副淨に於いて見出すであらう。けれどもその程度に達し得た名優は、今日に於いて僅々一二人に過ぎない。往日も亦然りであつたらうと想はれるのは、かつては副淨の名優と稱せられた麻穆子、李壽山、福小田等を今日の舞臺に聽いて、そのあまりに黄潤甫と距離があり、私の理想とする副淨の聲調と離れてゐるからである。

「黄鐘大呂の如し」と形容されるのは、正淨の聲調であつて、副淨のそれではない。それは沈鷙

深酷とでも形容すべく、あらゆる煩惱執着、嫉妬排擠、怨毒、絶望、厭世を盛つた聲調であつて、その間一點の餘裕もなく、些の遊戯的分子もあつてはならない。「唾壺を擊碎すべし」といふ程度では、まだ正淨の域を脱しない。直ちに肉をゑぐり、その血を飲むが如き、はた又毒盃を傾けつくした時の胸苦しさ、切なさを象徴するやうな聲調こそ、副淨の唱のクライマックスである。

然らば副淨の白は如何かといふに、大體に於いて齒切れよく、斬釘截鐵と形容される以外、奸黠な横紙破りな點、苦い茶を飲んだ時のやうな苦味、澁味、甘味を併せ帶びてゐなくてはならない。

做はどうかといふに、「緊密」の一語を以て悉くされるほど、無駄がなく引きしまつて居り、よくその扮する人物を描寫しなくてはならない。そしてその一擧一動を以て舞臺の空氣を引きしめる覺悟がなくてはならないのである。

「演劇不過傳古人事、古人事不外忠奸、然狀忠易、狀奸難」と故黄潤甫のいつたやうに、よく古人の心術を揣摩し、之を舞臺上に再現するに非ざれば、觀客の首肯を得がたい。皮黄劇北京に入つて以來、副淨を以て著はれたもの、黄潤甫以外その例少き所以である。

三

紋上のやうな資格を以て架子花臉が描き出さうとする性格は、普通いふところの敵役の一語を以てしては完全に說明出來ない。京劇は主として古人を描寫するものであるから、之を歷史的に見て如何なる性格の人物を架子花臉を以て表現するかを研究しなければならぬ。大體左の四ツに分類することが出來る。

(一)奸雄型

曹操、董卓、司馬懿、歐陽芳、秦檜、嚴嵩、のやうな性格。中にも曹操と歐陽芳とはその代表的なもので、試みに曹操を主人公とする「逍遙津」、歐陽芳を主人公とする「下河東」の二劇を見れば、此型の性格がよく分る。此外伊立、劉瑾、王振のやうな惡官宦等も、此型に類似せるものである。

(二)快漢型

張飛、馬武、單雄信、鄭恩、孟良、焦賛、楊延德、魯知深、李逵、兀求、牛皐、金大力の樣な心胸のカラッとして青竹を割つたやうな性格。粗暴でゐて涙もろく、愛嬌があり、人好きがして運のよい型。演義に出て來る所謂「福將」といふのは此型に屬する。張飛、魯知深のやうな型だといへば、支那人でなくても理解出來るであらう。

(三)豪俠型

鮑自安、竇二敦、鄧九公等のやうな人物、俠客にして心胸豪快に、自づから傾慕の念を起させるやうな型。稍々前記快漢型に類してゐるが、その中多少の差異がある。魯知深と竇二敦とを對照すれば最もよく分る。

(四)惡覇型

李佩、濮天鵬、武天虹、殷洪、李七の如き綠林の豪傑であるが、例へば竇二敦程の天分なく、一味奸橫といふ程の性格。

此外姜維、專諸、馬謖、嚴顏、黃蓋、楊阜、高行周のやうに、以上のいづれにもあてはまらぬやうな性格も、副淨に依つて扮せられてゐるが、それが如何なる理由に基くかについては、先輩の指敎を得たいと思つてゐる。尤もこの中、一部は正淨の範圍に屬すべく、他の一部は容貌

の魁偉であつたといふやうな形貌上の特徴から、架子花臉の中に入れられたかとも思はれるのである。

四

「武淨」は立廻りを主とする役柄で、唱白共に重きを置かず、隈取りと武藝を生命とする。武劇に於いては武生に次ぐ役柄で、「艷陽樓」「鐵籠山」等、今日一般に受ける武劇は武淨戲である。

第二節　何桂山以後の諸優

汪正士　字は毛、老生程長庚と同時代で、聲望があつた。何桂山の師として知られてゐる。

何桂山　正淨中の程長庚である。父名は喜福、桂山はその九番目の子であるので、世呼んで何九といふ。父は山東の某縣令であつたといふが、確かではない。兎に角桂山は少年時代を父に隨つて山東で暮し、父の病歿後、保定全慶園に入り汪正士を師として黑頭を習つた。一年にして學成り、北京に歸つて三慶園に入り程長庚の指導を受けた。俞菊笙の春台班を組織するや、その聘に應ず（時に程長庚歿後なり）。其後各班に演じ民國後は第一舞臺、及び文明園に出演した。二年病歿せる時年七十餘歲。子一人名を佩亭といひ、武淨を習ひ中材。

彼は銅錘花臉の正宗である。一劇評家は、四十年來一黑頭あるのみ、何九がそれであると評した位。崑曲亂彈共に精しく、殊に「醉打山門」「嫁妹」「火判」等が有名である。咽喉は黃鐘大呂といふ形容詞に、文字通りにあてはまり觀客席の最後にゐても、膝つきあはせて話してゐる位に聞えたといふ。その程長庚と合演するや、程も亦調子を低くして吳れと賴んだ位であつた。張聊子氏の「北方伶官史」に曰く。

「黃鐘大呂の音を以て、震聾發聵の響を成すや、台下これがために神往す。鐵嗓の目あり。唱は純ら丹田より氣を運らす。腔調平正なれども韻味醇厚。譚鑫培は並世の諸優に於いて、稱許するところ少し。獨り桂山の唱を愛す。」

「菊部叢刊」に曰く。

「唱は純ら中聲を取り、花腔を尙ばず。」

彼は有名な酒好きであつた。臨終前病中と雖も酒杯を棄てず、家人は彼の死後酒壺を棺の中に

入れてやつた位であつた。よく色を好み、狹斜の巷に遊び、俳優中の女形とも狎れた。性直爽にして金ばなれがよかつたので、俳優の間に極めて人望があつた。自分のやる芝居の順序などは、テンデ頭の中になく、前から二三番目で演らされても平氣、大軸や壓軸を演つても嬉しがらない。唱つてしまへば金を握つて飲みに行くといふ風であつた。今時こんな役者は、一寸見附からない。

金秀山　滿洲人で、もとある茶館の子僧であつたが芝居が好きで素人役者の群に入つた。德珺如と仲が善かつたが、秀山の容貌が頗るまづかつたので、德は君は花臉になつたがよからうと勸め、金もその氣になつたのだといふ。初め阜成園で唱つたが、後漸く聲譽雀起して何桂山に迫つた。何は此子敎ふべしとて延いて弟子の列に加へた。彼は容貌醜く滿面あばたであつたが、擧止莊重氣度宏偉にして古人の風あり、正淨の體格としては立派なものであつた。唱は悲莊沈着、燕趙悲歌の遺意ありと稱せられた。「忠孝全」「黃金台」「法門寺」「開山府」等の劇有名。鼻音を用ひたのは彼が始まりだといふ。民國三四年頃病歿。子少山は淨、仲林は生を唱つたが皆中材。

劉永春　字は建衡、北京人。影繪使ひの家柄であつたが、何桂山の高弟劉明久なるものに見出され、その弟子となり、次いで沈德奎の敎を受け、初めて永勝奎班に出演し、次いで四喜班に屬した。時に孫菊仙四喜班首たり、劉孫と合演して名大いに彰はれ、上海某園に聘せられた。歸京後、內廷供奉となり、孫菊仙と組んで譚鑫培 汪桂芬と競爭したが、終に譚の破るところとなつて上海に落ちた。爾後山東大連各地を巡業し民國後一兩回北京に歸つて演じたことがあるだけで、今日の北京人には少しく馴染がうすい。唱は何桂山の衣鉢を受け、花腔を尙ばず今日に在つては一の典型である。次子少衡、老生より靑衣花旦に改め、少しく名がある。

李穆子　金秀山より少し前の時代の俳優だと思ふ。花臉中の余三勝ともいふべく、花腔に長じてゐた。

劉壽峯　嗓音は劉永春より大きい位だが、持久出來ないのが缺點。前淸の末上海大舞臺の聘に應じ、その地に土着した。

納紹先　金秀山の唯一の弟子である。嗓音は少しく狹いが腔調頗る佳。「李陵碑」「牧虎關」等が得意。上海で同業者に嫉視され、藥を飲まされてから嗓音一度に落ち昔日の面影がない。

郎德山　上海有名の花臉である。嗓子宏亮、腔調少しく讒る。

裘桂仙　何桂山の胡弓彈きで後優となる。今日では先づ彼を算へる順序であるが、扮相貧弱、

藝も老境に入つて日に衰へつつある。

董俊峰　黄潤甫の弟子で殆んど上海に土着してゐる。嗓音寛泛、今少しくしまつてゐたらいい花臉である。

玉連浦　もと小金鐘といひ、富連成出身。少年俳優時代は有名だつたが、目下は駄目。

第九章　副　淨

第一節　黄潤甫前後

徐寶成　老生程長庚から四年遅れて、明治十六年に歿してゐるから、副淨としては最古い。今賣出しの青衣徐碧雲の祖父である。何でも非常に博學（劇の方で）であつたので、祖師爺といふ綽名があつたと。

慶春圃　卽ち慶四として知られた名優である。程長庚と「二進宮」「天水關」等を合演し、工力悉敵と稱せられた。聲調寛朗にして白に長じ、「審李七」等無上の上品といはる。黄潤甫の先驅者である。かつて四喜班に於いて、同僚葉忠定の逐ふところとなつたが、死後の聲譽は葉の及ぶところではない。

錢寶峯　現存武淨の大家錢金福の父である。最張飛に扮するに妙を得、「蘆花蕩」の一劇、空前絶後といはれる。この外「取洛陽」「轅門斬子」等も有名。隈取りは殊に立派であつた。

葉忠定　字は崑榮、江蘇太湖の人。嵩祝班に附學し文武崑亂みな精妙に至る。後四喜班に入り、勤續三十餘年に及んだ。嗓音沈着にして洪亮、身材も亦長大で奸雄劇に巧みであつた。「下河東」「黃金臺」「寶蓮燈」「捉放曹」等、その狼厲の狀前古未曾有と稱せられた。最も齒ぎしりをなすことに長じ觀客をして寒からずして慄然たらしめたといふ。世に處する亦奸雄の如く、性陰險にして專横、名優王九齡の如きも彼には閉口してゐたといふ。富連成社長葉忠善はその次子である。長子福海は父の藝を多少傳へてゐる。現に富連成教師。

黃潤甫　錢寶峰慶春圃二人の長を取り、集大成したものが黃潤甫である。滿洲旗人で三番目の子供であつたので、黃三といはれた。初め西城松筠庵の票友であつたが、曹操劇の名手、朱大麻子の門に入り、終に俳優となる。年輩は孫菊仙と相若く。副淨の名手として、特に曹操に扮するに妙を得「活曹操」の綽名は誰知らぬものもない。後清廷の供奉となる。晩年家貧、死に至るまで登臺し、民國五年病歿した。

その唱はむしろ古調といふべく、花腔を尙ばず、而も韻味に富んでゐた。說白はその擅長とするところで一字一句力あり、響脆の能事を盡した。

得意の劇は「審李七」(慶春圃を傳へて出藍の譽あり)「捉放」「逍遙津」「下河東」「取洛陽」「戰宛城」等枚擧に遑がない。

彼は曹操劇を朱大麻子に、「審李七」等の劇を慶春圃に、張飛劇を錢寶峰に得、錢慶黃といはれた程であるが、それ以上に彼は自修に得るところが多かつた。奸雄の心理を揣摩することにかけては、古往今來彼以上の名優はなかつたといはれてゐる。彼はかつて人に向つて、次のやうに語つたことがある。

「演劇は古人の事を傳ふるに過ぎない。古人の事は大別せば忠と奸とに外ならないが、忠を狀するは易く、奸を狀するは難い。吾固よりその難きものをつとめて爲し、以て世を驚しめたい。吾性奸を好むのでは、さらさらない。

「漢の曹阿瞞、宋の歐陽芳は、吾の最恨むところである。故に吾二人の劇を演ずるや、必ずその奸相を窮める。人がこれを罵しること愈々多ければ、我心は愈々快ろよいのである、金の兀朮は一代の豪傑であり、賓爾敦は近時の大俠であり、吾極めて之を喜ぶ。故に二人の劇を演ずるに當つてはかの曹歐陽二人の場合とは異る用意を以てする。凡そ我が狀せんと欲する人は、必ずその

品類を度り、その性情を察し、その身世を考へる。李七を狀する用心を以てしては、竇爾敦を狀しない。焦贊と李逵・曹操と歐陽芳、張飛と焦贊、兀求と韓昌、其間に區別がなければならぬ。今の若者が古今の人物を狀するを見るに、どれを見ても同じやうである。歸しむべきである」

彼はかつて西太后の面前に於いて、孫菊仙と「逍遙津」を合演し、自から曹操となつて狼厲度を越へ、西太后赫怒したといふ話も殘つてゐる。要するに彼は副淨の譚鑫培である。

李連仲　黃潤甫より時代少しく遲れ、博學を以て名あり。これといふ人を驚かす藝もなかつたが玉成班に在つて黃月山の配たり、前楊小樓とよく合演した。私の見るところを以てすれば、彼は張飛劇が適所であつたと思はれる。

麻穆子　票友出身。發音黃潤甫に近く、假黃三の名があつた。一寸聽くと潤甫かと思ふが、よく聞くと浮僞歷々として指さすべし。久しからずして箔はげ、今や天橋に藝を賣つてゐるが人の顧みるものなし。

李壽山　李壽峰の弟、世呼んで大李七といふ。初め崑旦、後副淨に改む。驅幹長大に過ぎ、閻の拔けたところがある。崑曲が得意で「奇雙會」の崑生、「風箏誤」の彩旦共に絶佳。

第二節　『活孟德』郝壽臣

一

副淨は、老生や女形と違つて地味な役柄であり、給金等も他の役柄よりは少いので、之を學ぶものが多くないのは勿論であるが、加ふるに甚だ學び難く、巧なりがたい故を以て此役柄で名優の名を殘したものも從つて少い。今日でも人材寥寥たるものである、が然し名人は不世出である。今日支那劇界に於ける副淨の第一人者である郝壽臣は、競爭者少きの故を以て御山の大將として持て囃されてゐるのでは決してない。彼は現存の名優中、女形としての梅蘭芳、老生としの余叔岩、武生としての楊小樓、其他諸人と比較して一歩も讓らない名優だ。その世に知らるること廣からざるは、卽ち副淨その物の地位に依る。豈浚すべけんやである。

郝、名は瑞、字は壽臣。京兆香河縣の原籍。郝家は香河縣の望族であるが、郝の父は北京で商賣をやつてゐたので、壽臣は北京の產れである。幼にして劇を好み、李連仲の門に入つて正淨を學び、十五歲にして初めて天津天福園に小奎祿と名乘つて出演した。時に汪桂芬上海より歸らん

とし、天福園で三日間演じた第三日郝は汪の配角として「取帥印」を演じた。義和團事件起るや一時俳優をやめ獨逸兵營の事務員たること五年、又舊業に復して天津會芳園に入り、それから哈爾賓、營口、芝罘等を打つて廻り、更に路三寶馬德成等と朝鮮京城、滿洲安東縣に演じ、宣統元年歸京し路三寶の紹介で東安市場の丹桂園に入つた。この頃まで彼は正淨を專攻してゐたが、嗓音が落ちたので傍ら副淨を學んだ。丹桂園にゐた頃、「審李七」を演じて世人を驚かしたこともあるといふ。宣統三年頃からは副淨專問に改め、一意黃潤甫を學び、名譽逐日高まつた。劉鴻昇の鴻慶社にも出演した。上海にも行つた。民國九年漢口に行き、歸京後老生高慶奎と三慶華樂兩園に演じ又梅蘭芳に從つて二度上海に行き、愈々副淨の第一人として推さるるに至つた。

彼は大體黃潤甫を宗としてゐるが、往往にして何桂山、金秀山をも祖述し(「開山府」等)、近年又かの葉忠定の長子葉福海から「醉打山門」「蘆花蕩」等の崑劇を學んだ。外江にゐたこと久しいだけ新劇も大分知つてゐる。爲人樸素、熱心なクリスチヤンである。本年取つて四十歲。

二

彼はもと正淨をやつてゐただけ、今でも副淨としては咽喉のいい方である。私の見るところを以てすれば副淨は咽喉のいいことが第一條件でなく、その音の澁くさびてゐることが必要なのであるから、郝はこれ以上咽喉がよくなるには及ばないと思ふ。支那人は彼の音を「沈悶」と形容してゐるが、それこそ副淨の唱として理想的なのである。澁くさび、浮はつかず、苦がい味のある低音では、彼こそ北京劇界の第一人である。節廻しもうまく、何としても副淨では現存の第一人である。

何よりも立派なのはその說白である。斬釘截鐵とは彼のためにつくつた形容詞のやうである。楊小樓王瑤卿等と、役柄は違ふが併稱する價値がある。試みに「逍遙津」や「連環套」のせりふを聽いて見るがよい。私の言の誤まつてゐないことが判るであらう。

表情絕佳。よく劇中の人物をのみ込んでゐるのでソツがない。仕草もよし。

武工は侯喜瑞等に劣る。武淨としての生命なき所以である。

扮相は背あまり高からず横に張つた體格で、副淨としては理想的。隈取りは錢金福に及ばないといふ評判である。

よくする劇は頗る多い。その重なるもの。

(一)曹操劇　「逍遙津」「捉放曹」「青梅煮酒論英雄」「戰宛城」「陽平關」「長板坡」「華容道」

(二)歌陽芳　「下河東」

(三)伊立　「樂毅伐齊」

(四)馬武　「取洛陽」

(五)李七　「霸李七長亭」

(六)專諸　「別專母」

(七)寶爾敦　「盜御馬連環套」

(八)馬謖　「失街亭斬謖」

(九)張飛　「瓦口關」「醉打曹豹」「長板坡」「蘆花蕩」「黃鶴樓」

(十)魯知深　「醉打山門」

(十一)嚴嵩　「開山府」

(十二)東逵　「丁甲山」「鬧江州」「青風寨」「扈家莊」

(十三)鄭恩　「斬黃袍」

(十四)司馬懿　「胭粉計」

(十五)劉瑾　「法門寺」

(十六)王振　「忠孝全」

(十七)魏延　「戰長沙」

(十八)秦檪　「寶蓮燈」

右各劇はいづれ劣らぬ彼の十八番であるが、彼が此等を演ずるに當つて出來るだけ全本を演じ、或は久しく中絶してゐた劇を復活するといふ方に意を用ひてゐる事は、彼を北京劇界の新人として價値づけるものである。「捉放曹」の全本をやる例を復活したのは彼だ。「青梅煮酒論英雄」「別專母」「瓦口關」「醉打曹豹」を北京の劇界に復活したのも彼だ。「樂毅伐齊」「連環套」の全本を初めて演じて見せたのも彼だ。彼は副淨の京劇に於ける地位を高むべく、天から北京劇界に與へられた選手であり、或點までそれに成功してゐる。

侯喜瑞　北京人、回教徒で本年三十二歳。字は霈如、かの富連成科班の第一回卒業生で、梅蘭芳と同期である。初め武淨を習ひ、後副淨に改めた。扮相郝壽臣に讓らず、武工は却つてその上に出でてゐるが、何しろ咽喉がよくないので、その點劣る。說白も佳。郝が諸葛亮ならば侯は周瑜であると評せられてゐる。郝が動もすればやり過ぎるとの評があるに反し、侯は氣力續かず、今一息といふ感じがある。然し富連成にゐて少年時代から北京人に馴染が多いので、歡迎者も少くない。「青風寨」「開江州」「丁甲山」等が得意。ただ「捉放曹」とか、「逍遙津」又は「審李七」などは、咽喉の關係でやれないのは是非もない。

關小田　李連仲に亞ぐの老輩であるが、藝は平凡、これといつて取立てていふほどのこともない。

馮志奎　上海第一の副淨である。長く孫菊仙と「逍遙津」等の劇を合演して名があつた。

普世亨　北京の二流副淨で、「失街亭」の馬謖などいいといはれてゐた。

陳富瑞　富連成出身、侯喜瑞の後繼者と目されてゐる。

馬俊山　二流副淨。

梅菜齋　體格の小さいのが欠點。劉鴻昇の配角であつたが、劉死後現はれず。

蔣少奎　民國十二年頃から北京の劇界に知られて來た。扮相侯喜瑞に次ぎ、咽喉もあるにはあるが、唱白共に味がなく、まだ武淨の型を脫しないところがある。然し努めて怠たらずんば今少しは發達するだらう。

第十章　武　淨

錢金福　本年六十四歲の老優で、現存武淨の泰斗である。滿洲旗人。父は某王府の事務員であつたと。一說にかの錢寶峰の子であるといふ三慶科班で崇富貴に敎を受けた。隈取りは天下一品の稱がある。咽喉が惡くて殆んど音を成さないが、それに拘はらず數十年の盛名を持續してゐるのは隈取りとそれから武工の型のよき事に依つてである。崑曲に精はしい。得意の劇は「山門」「火判」「蘆花蕩」「慶陽圖」等である。

范寶亭　武生范福太の子である。福壽科班出身で本年四十歲。北京有數の武淨である、劉奎官はその弟子である。

許德義　名老生許蔭棠の子、福壽科班出身で本年三十九歲。范寶亭に相並んで現存武淨の錚錚たる者。「金沙灘」「鐵籠山」「收關勝」等が得意。

何佩亭　何桂山の子。家學淵源見るべきものあり、許范二人に劣らないが、酒食に溺れて出ず。

殆んど落伍せるものと見られる。

劉鳳奎　正樂社出身で尙小雲王三黑等と同期。卒業後各班に演じ、近來漸く頭角を露はして來た。「金錢豹」の猴兒に扮して今最有名。

王永利　武生王聚寶の子、名花王蕙芳の兄で、本名を蓉芳といふ。初め武生を學び、上海に行つて失音すると共に武淨に改めた。上海に在ること二十余年、同地劇界の有力者として大いにその俠客振りを發揮してゐる。

第十一章　丑

丑とは道化をいふ。もとより簡單に道化とは定義出來ないのであるが、一口にいへばまづかういふより外はない。丑の語源については面白い話がある。宋の徽宗の時、雙人が來朝した。今の雲南地方の人種で、面の色が黑く脊が低かつた。徽宗はそれを見て余程滑稽に感じたと見え、俳優にその眞似をさせ、音が同じいのでそれを丑といつた。それがこの役柄の語源であると。一說には「醜」から出てゐるといふ。この方が普通に行はれ、わかりやすくもある。

丑は詼諧を主とする役柄であつて、性格の善惡に拘はらない。ところが一般には丑は小人、小惡人に扮する役柄であると解せられてゐるので、劇に依つては屢々然らざる性格の人間が丑に依つて演出されるのを不思議に思ふものが多い。昨年も「小京報」紙上で支那の劇評家の間に、右に關する論爭が行はれたが、そのうち徐彬彬氏の說明は、最丑の本質を論じて詳かなるものがあつた。左にその大意を譯す。

「丑は大衆の心目中に在つては、惡人又は不肖の人といふ觀念を形成してゐる。これ丑には、他の役柄に比べて惡人、不肖の人が多いからであり、又丑と醜と音が同じいからである。然し丑は滑稽を表演する役柄であつて、醜劣を原則とするものではない。「滑稽」の眞義を司馬遷の滑稽列傳に求むれば、丑の眞義も亦明白になるだらう。」

「試みに劇中の人物を取つて。滑稽が必ずしも正しい人であることを妨げない事實を例證しやう。

劇名	役名	性格
(一)取城都	王累	忠臣
(二)釣金龜	張義	孝子
(三)浣紗記	漁夫	俠烈
(四)樂茶計	浪子	義烈
(五)瓊林宴	樵夫	老成人
(六)落馬湖	樵夫	老成人
(七)取金陵	伍福	良將

「この外唐の程咬金の如きも、決して不正人でない。武丑中の朱光祖、楊香武、蔣平、賈亮の如きも亦然りであるし、劇中の地位も決して武生、武淨に劣るものではない。」

「又場合に依つては一劇中あまりに同種の役柄の多い時、丑の範圍に屬しないものを丑にやらせることもある。「取城都」の王累の如きは、同劇中にあまり老生が多いので、元來老生であるべき王累を丑に扮演させることになつたのであると思はれる。」

丑は二ツに別つ。

(一)文丑　別名を三花臉、小花臉といひ、通俗には丑又は小花臉と稱す。

(二)武丑　立廻りを主とするもので、別名を開口跳といひ、俗に武丑と稱す。便宜上丑に文武を分たずに記述し、個々の敍述の際に說明することとする。

劉趕三　丑で昔最有名であつた。「探親家」を演ずるときに、ほんとの驢馬に乘つて出たり、名人肌の奇行は枚擧に遑がなかつた。前淸時代屢々滿淸の時政を諷し、牢屋に打ちこまれたことも何度かある。譚鑫培に先だつて精忠廟の會首となつたこともある。明治二十七八年戰後、彼年既に八十有餘、ある時舞臺で李鴻章を諷し、偶々芝居見に來てゐた鴻章の子息に茶椀をなげつけられ、次いで入牛し、終に獄死したと傳へられてゐる。

黃三雄　高腔班の丑で、劉趕三と併稱せられた名手であつたが、一生不運で名を知られなかつた。

羅百歲　梅巧齡と同時代の青衣羅功福の長子で、本名を壽山といふ。幼にして梅巧齡の景和堂に隸し、出師後三慶班に屬し、汪桂芬王楊仙と三國志を演じ、蔣幹に扮して名一時に顯はれた。程いで田桂鳳、楊桂雲兩名花旦の重んずるところとなり、「雙釘計」「十二紅」「探親」「送親演禮」等滑稽にして警絕、晩年阿片をのんだが藝は少しも衰へず、丑の祖とまでいはれた。弟福山は老旦を學び、現存。

趙仙舫　劉趕三羅百歲より少しく遲れ、新詞を以て名があつた。本職は醫者。俗に大鼻子と稱す。

姜永泰　羅百歲より一寸先輩の丑で、多く田桂鳳と配戲した。

李百歲　唱工を以て名があつた。上海有名の俳優。「戲迷傳」「拾黃金」「十八杜」「丑表功」等得意。

陸金桂　崑老生陸長林の第三子。小春和科班出身。卒業後四喜班に入る。極めて博學であつた

けれども表情を善くせず、ただ腹の大きいので有名で、陸大肚といへば知らぬものもない。花旦陸風琴はその子である。

李敬山　羅百歳の親戚である。民國の初め梅蘭芳王蕙芳あたりと合演し、大分有名であつたが、藝は頗る俗で、劇評家の間には評判がよくなかつた。

張文斌　青衣張雲亭の孫同じく張芷荃の子。初め賈麓川から老生を習つたが、失音後羅百歳の門に入り丑を學ぶ。民國後漸く高く頗る王瑤卿汪笑儂等の重んずるところとなつた。その長所は自然にして且つ極めて雅なる點に在つた。羅百歳後の第一人であらう。

夏月珊　上海有名の丑。初めは老生、失音後丑に改めた。新劇に長ず。

高士杰　現存丑角中の先輩である。技倆はまづまづ可なり。高慶奎はその子である。

蕭長華　現存丑角中の第一人で、富連成教師を勤めてゐる。

慈瑞全　蕭に次ぐ。唱工稍々可なり。羅百歳の弟子で本年四十一歳。李敬山の亞流で俗だ。

遲子俊　山東人。初め老生で失音後丑に改む。最彩旦に長ず。本年五十六歳。

茹富憲　梅蘭芳の胡弓彈きであつた茹萊卿の孫で、富連成出身。本年二十二歳最よく蕭長華に

似て居り俗でないところがよい。

馬富祿　茹富憲と同學。少しく俗ではあるが藝の達者なことは若手中第一等である。

曹二庚　近來メキメキ賣出して來た。程艶秋の配角として程は左右の手視してゐる。

郭春山　藝は陸金桂と伯仲の間に在る。崑曲をよくするもの、現存丑角としては彼一人あるのみ。

賈多才　第二流の錚々たるもの。

劉義增　秦腔丑角中の錚々たるもので、藝の達者なことは無類である。

麻德子　滿人。武丑中の先輩である。常に譚鑫培と配戯した。

張黑　本名は張占福、直隷南皮の人。武丑としては一時代を劃した名優であつた。黄月山の配たること久しく、又程靈芝の秦腔班に屬してゐたこともある。得意の劇は「瘋僧歸秦」「盜銀壺」等。

草上飛　直隷河間の人。張黑の先驅者である。

王長林　現存武丑の第一人者。ただし近頃は老年のせいか主として文丑を演じてゐる。武工は張黑に讓るが架子頗る佳。往年譚鑫培の「天雷報」の老媼に扮し名があつた。

傳小山　北京人で本年四十二歳。票友出身で後王長林の門に入つた。王長林老年のために出でざるに及び現存武丑中の領袖である。

王福山　王長林の子である。藝はなほ生硬なるを免がれない。

支那劇と其名優（終）

支那劇と其名優

定價金貳圓

大正十四年四月十日印刷
大正十四年四月廿日發行

著者　波多野乾一

發行者　東京市外日暮里谷中本十八　佐藤三郎

印刷者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四百三番地　谷口熊之助

不許複製

發兌　東京市外日暮里谷中本十八　振替東京二參八八七番　新作社

發賣　東京市神田區錦町一の十九　振替東京六四〇五九番　文行社

□□松崎天民氏著□□

記者懺悔 人間秘話

四六判三百餘頁上製
定價 金壹圓八拾錢
書留送料 金十八錢

社會記者としての第一人者たる著者が廿五年の記者生活を自ら嘲り自ら哀れみつゝ恰も活動寫眞の映畫を見るが如く多事多難なりし遭逢を叙す。面白き中に涙あり涙の中に笑あり全文例に依つて魅力に富み、百六十餘項悉く愛讀に足る。小說か非ず、記錄か非ず、小說よりも面白く、記錄よりも生々しき此一卷を敢て新秋の讀書界にすすむ。

發兌 東京市外日暮里谷中本十八 振替口座東京四參八八七番 新作社

□□馬場孤蝶氏著□□

孤蝶隨筆

四六判三百五十頁上製箱入
定價 金貳圓
書留送料 金拾八錢

著者の文壇に立つ態度は餘裕ある眞劍のそれである。新らしき路に對する理解深きと共に、古き純正の趣味をも忘ることなきところ眞に誠意ある賢者の態度である。本書はこの聰明、多趣なる著者の會心の隨筆廿九種を集む。微妙の思考、巧緻の警語、文壇を飾る奇書たるを疑はず。

内容

△本所横綱 △大音寺前 △「にごりえ」の作者 △綠雨と一葉△ 藤村氏の「春」に描かれたる人々 △文學界のこと △職業婦人の危險 △昔の寄席 △文化の變遷と寄席の今昔 △故攝津大掾 △紅塵居漫筆 △怪力亂神 △大力 △大蛇 △魔術 △樹下漫筆 △籐椅子に倚りて △綠蔭茗話 一、敵討 二、弓の話 三、馬の話 四、槍の話 五、劍の話 △筆蹟の相似 △逝ける板垣伯 △淸夜雜記 △おでんの鍋 △夏日雜感

發兌 東京市外日暮里谷中本十八 振替口座東京四參八八七番 新作社

岡本綺堂

半七捕物帳

好評八版

第壹輯

内容

◇お文の魂◇石燈籠◇湯屋の二階◇春の雪解◇猫騒動◇お化師匠◇筆屋の娘◇帯取の池◇朝顔屋敷◇勘平の死◇

四六判四百頁上製布装箱入 定價貳圓廿錢 送料十二錢

好評七版

第貳輯

内容

◇雪達磨◇山祝の夜◇津の國屋◇半鐘の怪◇辨天娘◇廣重と河獺◇奥女中◇鷹のゆくへ

四六判三百五十頁上製布装箱入 定價金貳圓 送料十二錢

忽ち五版

第參輯

内容

◇半七先生◇化粧杏◇鬼娘◇少年少女の死◇雷獣と蛇◇狐と僧◇旅絵師◇お照の父◇向島の寮◇

四六判三百餘頁上製布装箱入 定價金貳圓 送料十二錢

發兌 東京日暮里谷中本十八 振替東京四三八八七番 振替長野三〇九三番 新作社

□□大村嘉代子氏著

たそがれ集

四六判四百餘頁上製羽二重表紙頒美本 定價金貳圓參拾錢 書留送料金拾八錢

本書は綺堂門下の才媛にして現代女流戯曲家中の第一人者たる大村嘉代子氏の第一戯曲集である。帝劇その他の劇場に屢々上演、好評を博したる『柳橋夜話』『刀鍛冶』『みだれ金春』『神代の巻』『法衣屋殺し』『春日局』『白糸と主水』『僧院の祕事』『渡り初め』の諸篇、何れも興趣深き作者會心の佳作である。

發兌 東京市外日暮里谷中本拾八 振替口座東京四三八八七番 新作社

エト9A49

□□澤田正二郎氏著□□

苦闘の跡

四六判三百餘頁上製
定價金貳圓
書留途料金拾八錢

劇壇の新人澤田正二郎氏の本を、初めて讀書界にお勸め致すは、新作社の喜びとする所である。『苦闘の跡』一卷は、新國劇一黨を率ゐて戰つて來た澤田氏が、半生の迂余曲折を叙した記錄で、血と涙と汗でつゞられた貴いヒエーマンドキユーメントといふも決して過賞ではない。中村吉藏氏は本書に序して、澤田氏は日本一の悲劇俳優であるといひ、その天分に裏書をされた。

菊池寛氏はまた序文の中に、澤田氏の苦闘は第一より第二へ、第二より第三へ、澤田氏の苦闘に雄々しさと謳歌されて居る。

澤田氏の藝術を愛好され、新國劇の舞臺を愛好される人々は、この『苦闘の跡』に依つて澤田氏の生々しい生活感に直面すべきであらう。劇界の新人澤田氏は舞臺以外に於て、果して何を考へ、何を語つて居るか。そして歩いて來た半生の苦闘の跡や如何に切に江湖の御愛讀を願ひます。—(新作社主人申す)—

內容

□決勝點を見出めて　□今の劇界への道　□北國の旅　□俳優を慕ふ女性
□新國劇奮闘史　□立廻りの話　□受難　□演劇私見　□難に克つ
□此頃の私の心持　□脚本「折伏の日蓮」

發兌

東京日暮里谷中本十八
振替東京四參八八七番

新作社

落